

第2次安平町総合計画の策定に向けた

「町民まちづくり会議」 提言書



平成28年9月27日

第2次安平町総合計画策定

町民まちづくり会議 参加者一同

「第2次安平町総合計画」の策定に向けた町民まちづくり会議からの提言書 目次

1. 町民まちづくり会議の設置目的	2
2. 会議の構成	2
3. 会議の経過	3
4. 10年後の安平町が目指すべきまちづくりの方向性に対する提言	4
5. 分野別のまちづくり戦略に対する提言	10
住民生活ワーキンググループ	13
インフラワーキンググループ	17
経済産業ワーキンググループ	24
健康福祉ワーキンググループ	32
子育て・教育ワーキンググループ	35
行政運営ワーキンググループ	43
資料編	47

1. 町民まちづくり会議の設置目的

町民まちづくり会議は、平成29年度から平成38年度までの10年間における安平町の最上位計画「第2次安平町総合計画」の策定にあたり、町民と行政職員が同じテーブルにつき、ワークショップの手法を通じて将来像の方向性や各分野の具体的戦略を話し合う場として、安平町まちづくり基本条例及び安平町町民参画推進条例に基づき設置されたものです。

安平町まちづくり基本条例	
(参画機会と広聴制度)	
第12条	町は、 <u>町政の基本的な事項を定める重要施策等の策定</u> において、 <u>町民参画を基本</u> に進めます。
2	町は、 <u>町民の意見を政策に反映させるため</u> 、重要施策等の策定にあたっては <u>事前に説明の機会を設ける</u> ことに努めます。
3	町は、町民からの提案、意見、相談、苦情、照会を聴取するための広聴制度を確立し、政策に反映させるための幅広い意見聴取に努めます。
4	町民の町政参画については、 <u>別に条例</u> で定めます。

安平町町民参画推進条例	
(町民参画の対象)	
第6条	まちづくり基本条例第12条に規定する町政の基本的な事項を定める重要施策等は、次に掲げるとおりとする。
(1)	<u>総合計画及び町の基本的政策を定める計画等の策定又は変更</u>
(2)～(6)	(略)
(町民参画の方法)	
第7条	町民参画は、意見聴取及び意見提出により行うものとし、その方法は、次に掲げるとおりとする。
(1)・(2)	(略)
(3)	<u>会議の形態をとり、町民を含む特定の構成員による継続的な討議等を通じて、一定の合意形成を図るための手続き</u>

2. 会議の構成

参加メンバーは、一般町民、各種行政委員、未来創生委員などから36名に行政職員(管理職)が入り構成され、行政分野別に6グループに分けて話し合いを行いました。(名簿：資料編)

グループの名称	行政分野
①住民生活WG	環境、衛生、循環型社会形成、交通安全、防災、通信
②インフラWG	道路整備、住宅、道路、河川
③経済産業WG	農業全般、商工、工業、企業、観光、雇用等
④健康福祉WG	福祉、保健、医療、介護、公共交通等
⑤子育て・教育WG	子育て支援、学校教育、社会教育、文化、スポーツ
⑥行政運営WG	参画、協働、情報共有、地域間交流、行革、財政等

3. 会議の経過

平成28年6月8日から同年9月27日までの間に、全5回の会議を行いました。

開催日		テーマと内容
第1回目	6月8日(水) 18:30～ 追分公民館	『10年後に安平町がどのようなまちになってほしいか考えましょう(目指すべきまちの姿)』
		<input type="checkbox"/> 総合計画策定アドバイザーからの助言 <input type="checkbox"/> ワークショップ①(住んでみて・活動してみたの感想) <input type="checkbox"/> ワークショップ②(目指すべきまちの姿)
第2回目	6月28日(火) 18:30～ 町民センター	『「目指すべきまちの姿」の実現に向けた安平町の「強み」を考えましょう』
		<input type="checkbox"/> 前回の振り返り <input type="checkbox"/> ワークショップ①(安平町の「強み」とは?) <input type="checkbox"/> ワークショップ②(目指すまちの姿を実現に向けて、特に重視するもの・伸ばすべき「強み」は何か?)
第3回目	7月26日(火) 18:30～ 追分公民館	『具体的な将来像の方向性を確認し、実現するための戦略を考えましょう』
		<input type="checkbox"/> 前回の振り返り <input type="checkbox"/> ワークショップ①(10年後の将来像の方向性を確認) <input type="checkbox"/> ワークショップ②(将来像を実現するための戦略検討)
第4回目	8月30日(火) 18:30～ 町民センター	『具体的な将来像の方向性を実現するための戦略を考えましょう』
		<input type="checkbox"/> 前回の振り返り <input type="checkbox"/> ワークショップ(将来像を実現するための戦略検討)
第5回目	9月27日(火) 18:30～ 追分公民館	『「10年後の目指すべきまちの姿」と実現したい各分野の方向性をまとめましょう』
		<input type="checkbox"/> 前回の振り返り <input type="checkbox"/> ワークショップ①(将来像・将来テーマを協議) <input type="checkbox"/> ワークショップ②(戦略案の最終確認)

4. 10年後の安平町が目指すべきまちづくりの方向性に対する提言

私たちは第1回目の会議から第3回目の会議まで、あらゆる世代が「生きることを楽しみ」「心穏やかに」そして「安平町に住んで良かった」と思える10年後を迎えるための具体的な将来像について行政職員とともに協議を重ね、その方向性を確認しました。

<第1回町民まちづくり会議>

○10年後に安平町がどのようなまちであってほしいか、どのようなまちにすべきか「目指すべきまちの姿」について協議しました。

【究極の目標】

- ◇生きることを楽しめるまち
- ◇ここに住んでよかったと思えるまち
- ◇(安)心が(平)穏やかになるまち
- ◇活気のあるまち
- ◇居心地のよさが感じるまち
- ◇たのしいまち

【より具体的な目標】

- ◇若者が住みやすいまち
- ◇教育と子育てで選ばれるまち
- ◇高齢者も楽しく生きられるまち
- ◇老後安心して生活できるまち
- ◇暮らす人々が役割を感じられるまち
- ◇助けあえるまち

夢と希望を持った子どもたちの笑顔があふれ、元気な高齢者は社会に貢献しながら、生きがいを持って生活し、町内外の人々の交流が活気をつくり、暮らす人々が役割を分担しながら発展していくことによって、究極の目標である「生きることを楽しめるまち」「ここに住んでよかったと思えるまち」「(安)心が(平)穏やかになるまち」が実現する。

[グループ発表より]

- ・特に高齢者を支えるためには、若い人に住んでもらわなければならない。
- ・若い人たちがたくさんいるまち。子どもたちがたくさんいて賑わうまち。
- ・巣立つ子どもたちがまた帰ってくるまちが良い。人口減少に歯止めがかかる
- ・「おじいちゃん おばあちゃん」が元気で働き続ける。ずっと地域と一緒に仲良く暮らせることが望ましい。

「子ども・若者・子育て世代」がいなければ、これからの地域社会を支えていくことはできず、これらの世代がいるからこそ、高齢者も老後安心して楽しく生きることができる。

10年後も子ども・若者・子育て世代がこの町に住んでいることが前提であることを確認

<第2回町民まちづくり会議>

○10年後も、安平町が多くの「子ども・若者・生産年齢世代」で賑わうまちであるためには、具体的な目標（将来像）を設定することが重要であり、都会よりも優れ、他の町に誇れる「安平町の強み」を協議し、最重要政策は何かを検討しました。

【意見として出された安平町の強み（主なもの）】

- [立地条件] ◇大都市に近くて「ほど良い田舎」
 ◇鉄道・高速道路・国道など交通インフラがあり、空港・港に近い
- [生活環境] ◇牧歌的な風景と丘陵に広がる牧歌的な風景
 ◇地域内に希少生物が多く存在
 ◇災害が少なく気象条件も良い
 ◇ある程度生活インフラが整備され、宅地の地価も安い
- [産業経済] ◇世界に誇るG1名馬（種牡馬）が集まる希少な地域
 ◇北海道有数の作付面積を誇る菜の花
 ◇地域内に雇用があり、昼夜間人口比率（106.7%）が全国174位
 ◇メロン、和牛など、ブランド特産品が存在
 ◇有機農業を含む新規就農が継続
- [健康福祉] ◇地域コミュニティによる見守り活動など、地域独自で高齢者対策を実施
 ◇入院可能な民間病院がある
- [子育て教育] ◇地域に2つの公私連携型幼保連携型認定子ども園
 ◇コミスク・学社融合体制による幼小中高の連携が確立
 ◇文化・スポーツ活動で全国大会・全道大会への出場が顕著
- [コミュニティ] ◇都会にはない人情味の厚さ ◇意外にまとまりやすい町民気質
 ◇コミュニティ活動が未だに機能
- [行政運営] ◇行政が身近で住民意見の政策反映が早い
 ◇行政・地域住民が、意欲ある住民を応援する体制にある

【「安平町独自の強み」を活かした子ども・若者・子育て世代を取り込む具体策：発表】

住民生活WG	町外からの通勤者に対するPRによって子育て世代を取り込むべき。
インフラWG	企業にまちの魅力を知ってもらい、学社融合事業など地域と連携した生活環境という魅力により住んでもらう。
経済産業WG	基幹産業である農業を活かした「田園回帰」の場として移住につなげる。
健康福祉WG	空港・港などに近く産業・商業の拠点となり得る場所。スポーツ施設を通じて子ども・高齢者の体力づくり健康づくりを図り住み続けられるまちへ。
子育て・教育WG	人情が厚い適度な田舎が逆に強み。通勤者に安平町の人情を知ってもらい教育・スポーツの実績を町外へのアピール。空き家・中古住宅への住み替えを促進する。
行政運営WG	子育て・教育・福祉環境（保健師）が整っていることから、平日都会で働く方が住む場所として最適。農業（6次産業）へのサポートも充実している。

○私たちが第2回目の会議で検討した「安平町の強み」を、行政側で分野ごとに検証を行い、その結果、他の自治体に負けない行政分野は「子育て支援・教育」が柱となるという方向性が示され、これに基づき検討と確認を行いました。

【雇用（企業誘致）】〔行政側での検証〕

- ・大きな雇用を生む産業は工業用水が必要だが、安平町は水源に乏しい。
- ・震災後の企業リスク分散の動きは鈍い。
- ・まず立地企業を守り、町外通勤者1,800人を転入させる施策展開が重要。
- ・町外からの通勤者が安平町に住まない理由の調査が必要。
- ・最重点政策とはならないが、雇用確保は重要。恒常的受け皿が必要。

【住宅政策(移住・定住)分野】〔行政側での検証〕

- ・コミュニティ活動の維持が課題。その意味で移住対策は極めて重要。
- ・地区別の対応が必要。(追分地区は中古住宅の住替えを重視。早来地区は空き地の販売)
- ・大規模な宅地開発・分譲は、大都市との競争で対抗できない。
- ・町外からの通勤者がどうすれば転入するか、これを把握し施策展開するべき。
- ・民間賃貸アパートの家賃が高く同じ家賃なら都会から通勤を選ぶ声も多い。
- ・一軒家の借家を希望する子育て世代が非常に多い。
- ・子どもの保育・教育のレベルを移住先として選ぶポイントとしている方が多い。(連動)

【子育て・教育分野】〔行政側での検証〕

- ・周辺に勝る安平町の強みは「子育て支援・教育」と「住宅施策」の2本以外に考えられない。
- ・こども園の整備など、事業が進行中であり「子育て支援・教育」は外せないが、ニーズは多様であり、弱みを克服するには、覚悟が必要。
- ・ふるさと納税の使い道を子育て支援に明確化している上士幌町はわかりやすい。
- ・教育は住民から見れば「どこにでもある。充実していて当たり前」であり、今までと同じでは強みを活かしきれない。
- ・当町は、子育て支援やコミュニティスクールなど良い取り組みをしているが、それが町民に知られていない。PR手法を再考すべき。
- ・子育て支援と教育は、ターゲットは女性。移住・定住も決断者は女性。女性の視点が重要。

【住民生活（生活環境・行政サービス）分野】〔行政側での検証〕

- ・ハード事業を劇的に変化させることは困難。10年間で弱みを克服することはできない。
- ・財政を勘案しながら計画的に都市基盤整備を実施するほかない。

【福祉・医療分野】〔行政側での検証〕

- ・福祉は重要であり、目標とは別次元の世界にある。(行政サービスの根本)
- ・高齢者が生き生きと生活する社会を目指すことは行政の使命。
- ・ただし、「子ども・若者・子育て世代」を主にした場合、福祉分野がメインにはならない。

【商業振興分野】〔行政側での検証〕

- ・行政、商工会、各個店の考えが統一化されておらず。現段階で「強み」と呼ばれるものはない。
- ・今の経営者は生活でいっぱいの状態で、全体でどう活性化するかという視点に行き着かない。
- ・農業は政策が手厚い。商店主は65歳以降も年金が無く商売を続けていかざるを得ないが、65歳を超えると銀行融資が得られない矛盾

10年後も子ども・若者・子育て世代がこの町に住んでいるための重点分野とは？

まちづくり会議で多く聞かれた強み 『子育て・教育』

- 町内全域を対象とした公私連携認定子ども園がある
- 地域住民・社会教育が連動した育成の土壌がある
- コミスクの全校設置 ●スポーツ施設が充実している など

庁舎内専門部会(管理職)で、総体的に判断し最初に推すべき分野と結論付ける

最重点政策ポイント

子育て・教育分野

「子育て・教育」で他の自治体に負けない強みがあると分析

最重点政策ポイントと連動すべき政策

住宅政策(移住・定住)分野

「土地が安い」「都会に近い」「快適自然環境」にプラスして「子育てしやすい」が強みを増強

弱みを克服しながら強みを最大化する政策
(弱みは知恵で克服)

商業振興	住民生活
福祉・医療	農業振興
雇用・企業誘致	

交流人口・観光分野

安平町の知名度向上は、全ての政策を成功させる上で必要となる政策

最も強みがある「子育て・教育分野」を最重点政策に置き、併せて「住宅政策（移住・定住）分野」を連動すべき政策として、これを理解できる具体的な将来像を設定することを、第3回町民まちづくり会議で確認しました。

町民まちづくり会議では10年後の将来像の方向性について、様々な意見が出されています。

最終的な将来像の作文と将来テーマの設定については、これまで町民まちづくり会議で出された意見を踏まえたものになることを希望するとともに、将来像を実現するための具体的な政策・施策の検討において、その参考となることを期待いたします。

将来像に関して協議を行ったワークショップ

第1回町民まちづくり会議	10年後の「目指すべきまちの姿」の意見
第2回町民まちづくり会議	町の強みを活用した具体的な施策に関する意見
第3回町民まちづくり会議	町が方向性として示した作文及び将来テーマへの意見

第1回町民まちづくり会議（グループ発表における意見）〈なっていてほしい10年後の安平〉

①住民生活WG

- ・地産地消ができるシステムを作らないと外に流れるばかり。町内に還元させなければならない。特区を利用した工場誘致の可能性はないか？
- ・文化スポーツ分野でSLの話で盛り上がった。今日に至るまでの過去の歴史の振り返りは良いが、未来にどう活かすかストーリーが課題。
- ・地域コミュニティについて、新しく転入してきた住民にゴミ出しなどのルールが浸透していないという意見があり。解決策は行政に頼るだけでなく、町内会などで呼びかけるという話も出てきた。

②インフラWG

- ・公園があるだけでなく、皆が集える楽しい公園があるといい。
- ・永く住めるまち。ただ通りすぎるようなまちではなく長く住めるまち。
- ・巣立つ子どもたちがまた帰ってくるまちが良い。人口減少に歯止めがかかる。

③経済産業WG

- ・暮らす人々が役割を感じられるまち。周りの人たちから必要とされることが重要。生きがいややりがいを感じられることに繋がる。
- ・移住したいまちNO1。生活地として選ばれるということは、環境が整っていると認められること。
- ・働ける場所が多くなるまち。現在、苫小牧や千歳に働きに出る方が多いが、地元で働くことで人が増えれば賑やかになる。
- ・多くの人が訪れる活気あるまち。サラブレッドで名高い。PRすべきではないかという意見。
- ・文化スポーツでNO1のまち。ゴルフ少年少女の育成の話が出ていた。国内外で優勝できる選手を育成したい。沖縄でやっているようなゴルフ場の空いている時間を利用できればいいのではないか。

④健康福祉WG

- ・住み続けられるまち。これには病院・福祉サービス・商店が必要。人口が減少していくと商店が減少する。こうなると住み続けることが厳しくなる。
- ・特に高齢者を支えるためには、若い人に住んでもらわなければならない。共働きをしないと暮らしていけない時代。0歳から預けられる場所が必要であり、シングルの方もいることから、若い方が働きやすい環境として「病児保育」も必要となる。
- ・企業が立地するには周辺人口として1万人が目安という話から、1万人を目標人口として掲げてはどうかという意見もあった。

⑤子育て教育WG

- ・スターバックスが出来るくらいのまち。スターバックスをおしゃれな町の象徴と捉えて、働くだけじゃなくゆとりのある文化的なところにも目を向けられたらということが出された。
- ・子育て教育グループから「おじいちゃん・おばあちゃん」というキーワードが多く出た。「おじいちゃんおばあちゃん」が元気で働き続ける。ずっと地域と一緒に仲良く暮らせることが望ましい。
- ・子ども（幼児期や小中学校だけでなく）の放課後活動の充実が意見で出され、スポーツ活動から子ども達がいろんな夢を持ち、オリンピックに出ることもあるかもしれない。

⑥行政運営WG

- ・一番多かったのが、若い人たちがたくさんいるまち。子どもたちがたくさんいて賑わうまち。
- ・若い世代などを含め最終的に人口が減っていかないまちに行き着くという話になった。
- ・これをクリアするには、福祉や買い物、交通アクセスなどの問題・不安を持っている高齢者に対応し、安心して死ねるまちが目標となる。
- ・この先に必要なのは町民の笑顔。
- ・町民の笑顔が外からまた新しい町民の笑顔を呼ぶというような10年後を考えていきたい。

第2回町民まちづくり会議（グループ発表における意見）＜強み＞

①住民生活WG

- ・安平町の良い点はたくさんあるが、安平町の町民がすべて知っているかということそうでもない。良い点をもっと町民が認識、集約、発信することが重要である。
- ・安平町は町外からの通勤者が多く、昼夜間人口比率が高い。そういった方は、安平町へは職場にくるだけの体験であるため、安平町全体を体験してもらうことで移住マインドを持ってもらえるかもしれない。極めて重要であると思う。

②インフラWG

- ・安平町は、空港・港・I C・札幌圏に近いなど四拍子揃っており、他には負けない強みがある。
- ・スキー・ゴルフ・馬やS Lの終焉の地であることは魅力的な資源である。
- ・これらが好きな人には、安平町に足を運んでもらい、さらには学社融合事業など地域と連携した教育環境という「魅力」をもって子育て世代に住んでもらうというストーリーが話し合われた。

③経済産業WG

- ・安平町の基幹産業である農業を活かし、都会から田舎へ移住定住するという「田園回帰」の場として魅力発信していくことが可能である。
- ・農産物を活かした学校給食や農産物直売所など、農業に関連した活躍の場の創出などにより、子どもから高齢者まで様々な形で農業とのかかわりを持つことができるのではないかと。

④健康福祉WG

- ・交通アクセスは良く、多くの交通網が交差するまちは少ない。
- ・福祉施設・スポーツ施設に関しても、数多くあり充実している。
- ・自然豊かで産業が充実しており、子育て世代の居住に期待が持てる。

⑤子育て教育WG

- ・適当に田舎であることは、逆に強みと捉える。更に安平町に住む人の人情などあたたかさがある。
- ・都市部に近い田舎である点に着目し、中古住宅・空き家の活用も検討できる。
- ・昼夜間人口比率の高さから、企業を巻き込んだ大運動会など、イベントを開催することで、周辺に居住する方に対し安平町をPRし、人情から知ってもらうことで移住・定住につながる可能性がある。
- ・教育・スポーツについても、学力向上や成績など実績が伴えば、町外へのアピールにつながる。

⑥行政運営WG

- ・安平町から町外に通勤するための交通アクセスや子育て・教育・福祉環境が揃っている。
- ・生活するうえでのサポート面（保健師やコミュニティスクールなどの活動）は充実している。
- ・起業希望者のサポート面も検討しており、6次産業化や新規創業の可能性のあるまちである。

第3回町民まちづくり会議（グループ発表における意見）＜主に作文に対する意見＞

- ・「チームあびら」のイメージが沸かない。町名を将来像に入れて良いのか検討が必要
- ・作文には高齢者と子どもの交流ふれあいに関する記述があったほうが良い。
- ・「高齢者」の活躍を作文で表現してほしい。
- ・10年間の目標を設定するにあたって、教育だけでよいのかという議論はある。
- ・数値目標が重要（若者世代の町外流出を防ぐなど）。
- ・「子育てと教育」は他市町村でも取組まれる分野であり、差別化が課題（他のまちに無いものが必要）また、住民に対するPRや情報発信が不足している分野でもある。
- ・提示された作文のストーリー性や具体性を示すことが重要である。

5. 分野別のまちづくり戦略に対する提言

第3回目と第4回目の町民まちづくり会議では、第2回目の会議で出し合った「まちの強み」とともに、「まちの弱み」や、安平町を取り巻く外的要因を「機会」「脅威」に分類し、これらを基に、SWOT(スウォット)分析と呼ばれる手法により、まちづくり戦略を検討しました。(第5回目に見直しを行い、全体で33本のまちづくり戦略が検討された)

<SWOT分析について>

SWOT分析とは、主にマーケティングに使う経営分析法であり、現状分析・戦略構築のため活用される手法です。SWOT分析では、S(Strength):強み、W(Weakness):弱み、O(Opportunity):機会、T(Threat):脅威、これら4つの視点から、外部環境と内部環境に分けて現状分析を行い、その後、「機会×強み」、「機会×弱み」、「脅威×強み」、「脅威×弱み」のクロス分析を行うことで、安平町のまちづくりにおける具体的な戦略を導き出す手法。

	内部環境	安平町の強み (Strength)	安平町の弱み (Weakness)
外部環境			
機会(追い風) (Opportunity)		【成長戦略】 ①強み×機会 「強み」によって「機会」をさらに活かす方向	【改善戦略】 ②弱み×機会 「機会」を逃さないように「弱み」を改善する方向
脅威(逆風) (Threat)		【回避戦略】 ③強み×脅威 「強み」を発揮して「脅威」を回避・克服する方向	【改革戦略】 ④弱み×脅威 最悪の事態を招かぬように弱みを克服し改革する方向

- ①強み×機会 = 成長戦略 ⇒ (積極推進) …成長する機会を逃さない
 ②弱み×機会 = 改善戦略 ⇒ (弱点強化) …やり方を変えてみてはどうか(民間委託など)
 ③強み×脅威 = 回避戦略 ⇒ (差別化) …強みで逆風を見方にできないか
 ④弱み×脅威 = 改革戦略 ⇒ (問題回避) …そのままやっても失敗。発想転換が必要

安平町の内部要因分析（強みと弱み）

強 み	弱 み
<p>【立地・地勢・その他全般】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎1 新千歳空港・重要港湾苫小牧港など交通拠点に至近 ◎2 JR駅、高速道路インターチェンジが立地 <p>【生活環境・インフラ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎3 希少生物が生息する自然豊かな生活環境 ◎4 生活利便性と自然環境が調和した暮らしやすさ ◎5 気象条件に恵まれ大災害が少ない環境 ◎6 丘陵が織り成す北海道らしい牧歌的な風景 ◎7 降雪の少なさ ◎8 全国屈指のメガソーラー発電所と世界最大規模の蓄電施設が町内に存在 <p>【経済産業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎9 雇用を生む規模の大きな企業が立地 ◎10 昼夜間人口比率が高い他の過疎地域にはない特殊性 ◎11 G1名馬(種牡馬)が集まる日本有数の軽種馬産業 ◎12 多種多様な農業の展開 ◎13 有機農業と慣行農法の共存に肝要な農業文化 ◎14 ブランド品「アサヒメロン」「カマンベールチーズ」の存在 ◎15 約75haの作付面積を誇る丘陵に咲く菜の花畑 ◎16 多数のCM撮影が行われる景観を保有 ◎17 プロゴルフツアー開催の名門コースを含むバリエーションに富んだゴルフ場の立地 <p>【健康福祉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎18 地域福祉を支える住民ネットワークが確立 ◎19 地域医療・高齢者福祉事業・しょうがい者福祉事業を展開する民間法人の存在 <p>【子育て・教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎20 地域で子どもを育てる意識の強さ ◎21 待機児童ゼロ（2016年） ◎22 公私連携型幼保連携型認定子ども園の整備 ◎23 「子育てしやすい街ランキング（2015年）」全道2位 ◎24 子ども医療費助成制度の充実 ◎25 子どもの数に対し文化・スポーツ活動で全道・全国レベルの活躍が顕著 ◎26 積極的就活支援など内外から注目を集める誘致企業会による追分高等学校との連携活動 ◎27 町立校の全てにコミュニティスクールを設置 ◎28 幼小中高の連携 <p>【コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎29 まちづくり基本条例・町民基金の設置 ◎30 コミュニティ活動が健在で防災や高齢者対策など自助・共助・公助の役割分担が機能 <p>【文化・スポーツ活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎31 屋内アイスアリーナ・鉄道資料館など近隣には無い希少スポーツ施設・文化施設が存在 <p>【行政運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎32 行政と住民の距離が近く住民意見の政策反映スピードの速さ 	<p>【立地・地勢・その他全般】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽1 深刻な人口減少と少子高齢化 <p>【生活環境・インフラ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽2 Wi-fi整備と市街地以外のネット環境の遅れ ▽3 空き家・空き地の増加 ▽4 道路の環境管理が行き届いていない ▽5 町内施設や看板に統一感がなく寂れた感覚 <p>【経済産業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽6 自己水源の恒常的不足 ▽7 商業への住民満足度の低さ ▽8 商店事業主の高齢化と後継者不足が顕著 ▽9 工業用地の敷地確保が困難 ▽10 地域資源のブランド力が低い ▽11 農家戸数の減少と高齢化による継承者の不足 ▽12 宿泊施設の不足 ▽13 圧倒的な集客力を持つ施設がない ▽14 民間の観光事業者不足 ▽15 体験型の観光コンテンツの不足 ▽16 まちの情報提供・PRの不足 ▽17 安平町の知名度が低い ▽18 観光資源間や近隣市町村との連携不足 <p>【健康福祉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽19 医療機関（総合病院）の整備が望まれている ▽20 地域公共交通に対する住民満足度の低さ ▽21 高齢単身世帯・要介護者等の増加 ▽22 ボランティア活動の主体者の高齢化 ▽23 地域福祉への理解が希薄化傾向 <p>【子育て・教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽24 合計特殊出生率の低さ ▽25 子どもを対象とした全天候型施設がない ▽26 児童公園の遊具の老朽化 ▽27 児童・生徒数が減少し、部活動や子ども会などの活動維持が困難 ▽28 PTA・子ども会育成会活動の担い手不足 ▽29 少年活動・部活動で利用できる子どものための交通機関が無い ▽30 1学級運営が多く、競合い精神の醸成が困難 ▽31 追分高等学校の存続危機 ▽32 学校施設の老朽化 <p>【コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽33 新しい取組みに消極的な風土がある ▽34 自治会・町内会等の役員の担い手不足 ▽35 自治会・町内会等への加入率の低下 ▽36 地域活動への若者参加者数の減少 ▽37 合併後10年で未だに存在する旧町の意識 <p>【文化・スポーツ活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽38 多目的に利用できる体育施設がない <p>【行政運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▽39 公共施設・公共インフラの維持管理費の増大

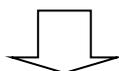
安平町の外部環境分析（「機会」と「脅威」）

機 会	脅 威
<p>【立地・地勢・その他全般】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●1 札幌圏への人口集中（チャンス） <p>【生活環境・インフラ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●2 地域の風土、自然への関心の高まり ●3 安全・安心に対する意識の高まり ●4 循環型社会、自然エネルギーへの関心の高まり ●5 ライフスタイル（価値観）の多様化 ●6 情報化社会、情報通信技術の普及 ●7 空き家対策法の制定 <p>【経済産業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●8 農業政策の改革（持続可能な農業） ●9 6次産業化・農商工連携への関心の高まり ●10 創業支援に対する国の施策の強化 ●11 グローバル化の進展 ●12 災害リスクを回避する企業行動 ●13 北海道新幹線の開業に伴う本州旅行客の増大 ●14 外国人観光客の増大 ●15 グリーンツーリズムへの関心の高まり <p>【健康福祉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●16 元気な高齢者の増加 ●17 医療・介護への注目の高まり ●18 日本版CCRC構築 ●19 健康志向の高まり（食、自転車、ウォーキング） <p>【子育て・教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●20 子ども・子育て支援法の制定 ●21 子育て支援サービスのニーズの高まり ●22 全国学力テストに対する関心 ●23 特色ある学校づくりに対する期待 <p>【コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●24 新しい公共の台頭（協働・参画型のまちづくり） ●25 地域課題を解決するビジネスへの期待 ●26 女性活躍社会への期待 ●27 地域のつながりの必要性の認識（災害教訓） <p>【文化・スポーツ活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●28 健康やスポーツに対する関心の高まり ●29 最適な夏の冷涼な気候を求めた合宿ニーズの増大 ●30 東京オリンピック2020年開催 <p>【行政運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●31 地方分権社会の到来 ●32 地方創生の取り組みへの機運の高まり ●33 コンパクトシティの重要性 	<p>【立地・地勢・その他全般】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼1 人口減少社会の到来と少子高齢化の進行 ▼2 若者人材の都市への流出（札幌・苫小牧） ▼3 北海道特有の冬期間の厳しい気候（厳寒・降雪） <p>【生活環境・インフラ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼4 自然環境破壊・地球温暖化による異常気象の増加 ▼5 世界規模のエネルギー危機の懸念 ▼6 非正規労働による経済不安 ▼7 サラリーマン世帯の総貧困化 <p>【経済産業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼8 農地集積など農業・農村の構造変化 ▼9 食料自給率の低下 ▼10 自由貿易時代の到来（TPP問題） ▼11 地域経済の衰え ▼12 雇用不安 ▼13 労働者人口の減少 ▼14 社会構造等の変化と雇用形態の多様化 ▼15 大規模店舗への消費流出 ▼16 団体旅行客の減少 <p>【健康福祉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼17 社会保障費の増大 ▼18 圏域の医師不足 ▼19 JR・民間バスの撤退問題 ▼20 交通弱者の存在と自家用車への依存 ▼21 買い物難民の増加への恐怖感 <p>【子育て・教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼22 出生率の低下 ▼23 ひとり親家庭の増加 ▼24 学力成果主義 ▼25 子どもの基礎的運動能力の低下 ▼26 子育てに対する不安感や負担感の増大 <p>【コミュニティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼27 核家族化・単身高齢者世帯の増 ▼28 人間関係の希薄化 ▼29 無関心層の増加 <p>【行政運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼30 公共事業に必要な国の補助金の削減 ▼31 社会資本の老朽化とインフラ維持更新費の増大 ▼32 国家財政への不安 ▼33 人口獲得競争時代の到来

住民生活ワーキンググループ

住民生活ワーキンググループでは、4本のまちづくり戦略が検討されました。

成長戦略



①地域コミュニティ活性化の推進

- ◆現在、取組みが行われている地域見守り活動などのコミュニティ活動や地域での高齢者対策を継続していくためには、ボランティアポイントの導入等によるボランティアの仕組みづくりを考える必要がある。
- ◆ボランティアポイントと商業ポイントを連動させるなど、老若男女が参加しやすい体制を構築していく。
- ◆若い人の取り込みによる地域コミュニティの担い手の確保、活性化につなげる。

②自治会・町内会組織、任意団体等の維持・強化に向けて

- ◆自治会・町内会の再編ではなく、地域活動等の必要性の意識醸成が必要
- ◆若年層の加入率低下や人口流出による会員数の減少により、地域コミュニティ活動の維持が難しくなっている自治会・町内会組織や各種任意団体などの維持強化に向けた対策、これらを束ねる統一的組織の設置検討などが重要である。



改善戦略

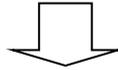
弱み

空き家・空き地の増加

×

機会

ライフスタイル(価値観)の多様化



①空き家（中古住宅）の利活用による人口確保対策

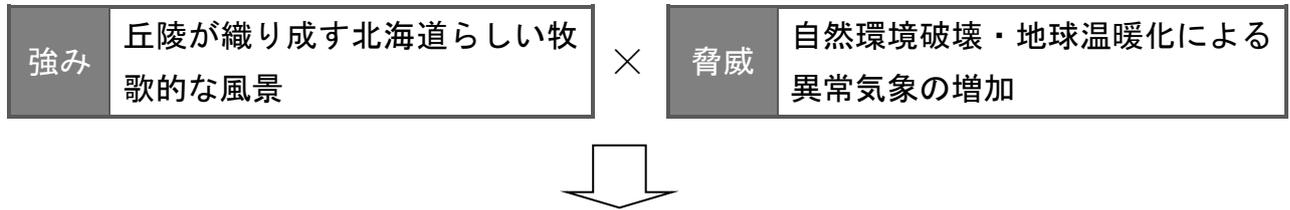
- ◆まず、空き家の実態調査（所有者、周囲の影響、再利用の判断など）を行い、「倒壊危険空き家」と「活用空き家（中古住宅）」の区分が必要。
- ◆一人暮らしの高齢者は子どものもとに移住し、空き家となるケースが多い。そういった空き家（中古住宅）を利活用する。
- ◆利用側ニーズに合せた仕組みの検討や賃貸する場合の家賃設定などの仕組みづくり
 - ⇒中古住宅購入者に対するリフォーム助成金
 - ⇒入居ニーズに沿ったリフォーム助成制度の構築（省エネ・ゼロエネ化、バリアフリー化等）が必要。
 - ⇒町内に不動産業者がないことから、中古住宅等の「空き家バンク」による情報発信を強化し、不動産の流動化を図ることが必要
 - ⇒子育て世代や町外者による空き家(中古住宅)購入の促進策のほか、新築建設・中古住宅の購入・リフォームにおける安平町の各種支援策の体系立てが必要
 - ⇒空き家のシェアハウス化も検討



最も重要なのは、これらの積極的な支援策を全国に向け宣伝すること

- ◆空き家を地域コミュニティの拠点等へ利活用できないか
- ◆高齢者の元に都会の子どもが移住する取組みも必要

回避戦略



①環境保全と環境教育の推進

- ◆牧歌的な風景や農地風景は観光資源にもなり得ることから、太陽光パネル（大規模太陽光発電所）などにより、景観が崩れないようにすることが重要
- ◆再生可能エネルギーを推進するうえでは、景観を守りながら持続性のある「まち」を目指さなければならない。
⇒再生可能エネルギーでエネルギー危機に備える（バイオマス・廃棄物）
- ◆残すべき自然の洗い出しが極めて重要であり、子どもに対する環境教育の充実も必要。
- ◆環境基本条例の理念に基づいた景観保全の取組みに加え、自然環境破壊に対する規制のあり方の検討、環境保全に関する学校での教育など、子どもから大人までの意識醸成に向けた取組みが必要

②牧歌的雰囲気合う企業の誘致

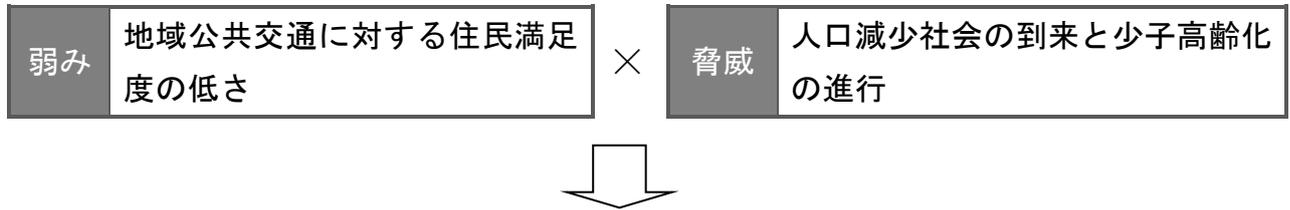
- ◆デザイン、アニメ、WEBほかIT関係など、自然環境に影響の少ない企業の誘致
⇒ただし、市街地以外では、光ファイバ整備が必要となる。

③フィルムコミッションの推進

- ◆牧歌的風景と農業畑作風景はロケ地としても活用できるものであり、観光資源にもなり得ることから、これら風景を残す活動と風景を活かしたフィルムコミッションを推進する。
⇒美しい景観に惹かれて人は来る。道の駅の開業とリンクした特産品開発も急がれる。

- ※ 安平町はこれまで「災害に強いまち」であったが異常気象で今後は不安である。
- ※ 森林保全をしっかりと組み、安全安心に暮らせる環境のPRが必要

改革戦略



①公共交通のニーズ調査、地域公共交通の再編など

- ◆公共交通に対するニーズの多様化により、JRやバスなど一般的な公共交通機関の乗車率アップには限度がある。
- ◆変わりつつある公共交通のニーズを調査し、住民がどのような場面で不便であるかを確認することで、新たな交通網形成・公共交通の再編などを検討する。
⇒ 具体例として、JRと連動した交通を工夫し、病院・スーパーへの接続など

②地域コミュニティと支え合いによる「住民の足確保」の取組み

- ◆地域を越えた支え合い活動によるコミュニティ交通の検討
- ◆地域住民の乗り合わせによる対応などの検討

③自家用車の共同利用策等について

- ◆自家用車の共同利用策を「町・企業・町民」の協働で検討する。
- ◆カーシェアの事業化などの検討も必要性が高まるのではないか。

④デマンドバス事業について

- ◆デマンドバスの利用簡素化について検討する必要がある。

インフラワーキンググループ

インフラワーキンググループでは、6本のまちづくり戦略が検討されました。
(行政内部で検討したものは除いています)

成長戦略

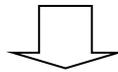
強み

気象条件に恵まれ大災害が少ない環境

×

機会

安全・安心に対する意識の高まり



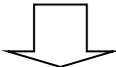
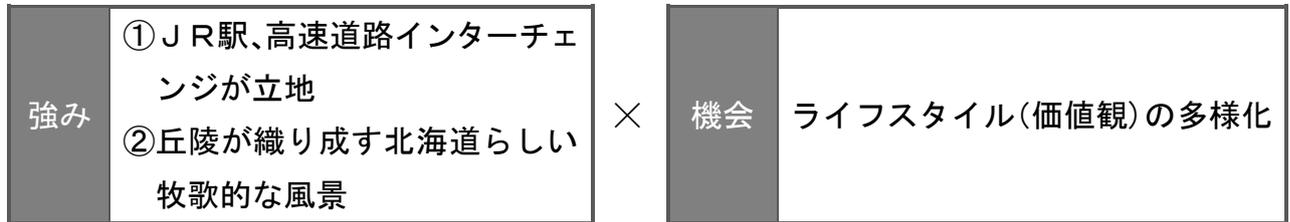
①住みやすいまちを前面に出した移住政策

- ◆安平町は他の地域で頻発する水害・土砂崩れ・停電などの災害が少ない。
*ただし、これまで運よく災害に見舞われていないだけであり、温暖化により今後は不安である。また、地震災害の可能性は安平町では否定できない。
- ◆移住・定住策の推進では、安全・安心を求める希望者が多いことから、これをしっかりと前面に出してPRしていくべきある。
- ◆世代ごとの収入に対応し、民間アパート、町分譲地、早来市街地町有地の小区画分譲、空き家・中古住宅の有効活用など、ニーズにそった住まい提供と、情報提供が鍵を握る。

※若い世代⇒集合住宅へ⇒その後家族が増加⇒新築又は中古住宅定住



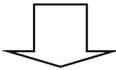
成長戦略



①住みやすく通勤も楽！PR作戦

- ◆安平町の苦手分野は「PR」である。
- ◆牧歌的な風景・環境にありながらも住みやすいアピールポイントをインターネット・SNSを活用しPRしていく必要がある。
 - ⇒札幌圏、通勤圏、買い物等施設までの距離・時間のPR
札幌まで〇〇分、空港まで〇〇分など
- ◆空き家や中古住宅を有効活用するにも、情報をしっかり提供して移住を促進する必要がある。
 - ⇒空き家や中古住宅を有効活用する方法の一つとして空き家（特に空き店舗）を利用してチャレンジショップなどに使えるようにし、移住のきっかけづくりとする。
 - ⇒PRポイントとして「シェアハウス」を入れると空き家対策に繋がるのでは

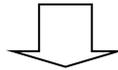
改善戦略



①市街地以外の情報通信基盤整備の検討

- ◆民間通信事業者は採算性を重視するため、当町の市街地以外のブロードバンド化が遅れている。
- ◆光ファイバ網整備には莫大な投資が必要であるため、町独自に対応することも慎重となる。
- ◆国では東京一極集中を解消するため、働き方改革の一環として地方におけるテレワーク推進に力を入れており、条件不利地域のブロードバンド化を検討している。
- ◆無線の高速化の技術の進展等も考慮に入れ、こうした国の動きに対応することが必要。
- ◆なお、安平町では市街地（早来市街地・追分市街地）におけるNTTフレッツ光のほか、町独自の取組みとして無線を活用したブロードバンド整備（あびらネット）、とともに、衛星ブロードバンドシステムの設備を無償貸付する事業を実施しており、これらの拡張も検討が必要である。

改善戦略

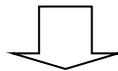
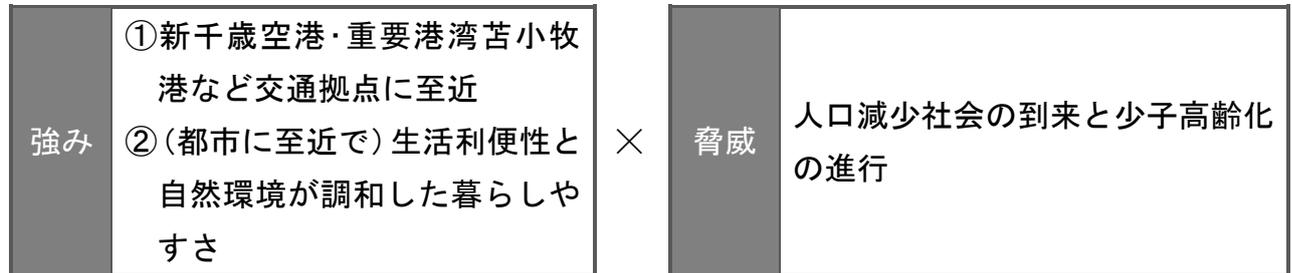


＜この項目は町民まちづくり会議では協議できませんでしたが、次期総合計画の策定において重要課題となる項目であるため、行政内の会議で確認された内容を記載し、戦略検討につなげるものとします。＞

- ◆国の動き ⇒ 国は国土強靱化計画、公共施設等総合管理計画など、市町村に対して策定を促しているが、これは昭和に行われた公共施設等の老朽化による維持管理コストが増大すること危惧し、その対応を市町村に求めているものである。
- ◆道路・橋梁 ⇒ 既存施設について修繕計画や長寿命化計画により計画的な対応が求められ、新規事業は減少することが見込まれる。(国の補助金は新規事業の採択が厳しくなっている。)
- ◆水道施設 ⇒ 水道ビジョン・経営戦略を策定し、計画的に維持管理するとともに、施設統合を図っていく考え。
- ◆下水施設 ⇒ 耐用年数期間内であり、管の入れ替えは10年で生じないが、下水処理施設の維持管理費は老朽化や拡張などにより増大する。
- ◆公共施設 ⇒ 公共施設の老朽化問題への対応は必須。また公営住宅のストック見直しも必要(新規の必要性)
- ◆その他 ⇒ 除雪体制の維持が喫緊の課題(業者が不足している)
- ◆業界関係 ⇒ 公共事業の新規事業が減少し、かつ、下水道整備が完了すると、地域内の経済に大きな打撃となる。これを回避するための戦略が重要となる。

維持管理が中心となる時代における地域経済の活性化のあり方について検討が必要

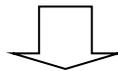
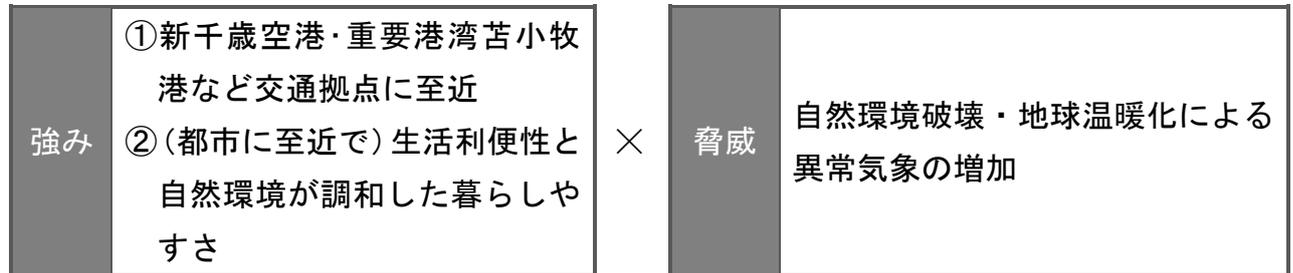
回避戦略



①安平町への通勤者の定住促進

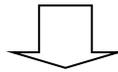
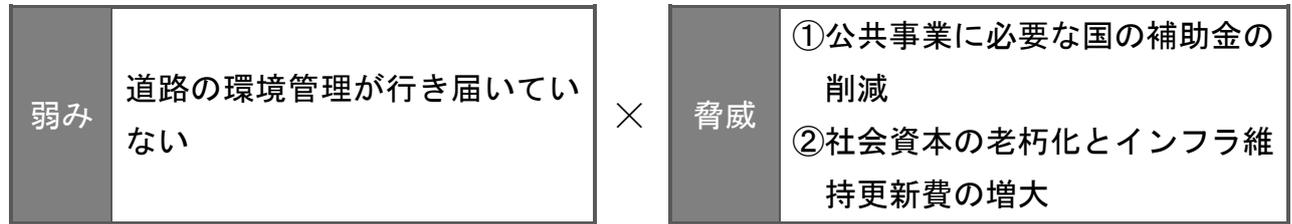
- ◆都市に近く通勤・買い物も楽にできるまちとしてPRし、定住対策を講じるべきである。
*ただし、行政側の検討会議では、都市部に近いことは逆に「弱み」でもあるという指摘も出ている。
- ◆町民一人ひとりが宣伝マンとなり、同じ職場にいる町外者に対して、安平町への移住・定住を勧める。
⇒ 町民も行政も、一人ひとりがみんなでもPRすることが重要ではないか。

回避戦略



- ①町民や子どもたちの手による自然環境保全運動
- ◆町内小中学生とともに安平川の保全活動を行い、自然環境の保全の必要性を啓発していく必要がある。
 - ◆団体が行う安平川における魚卵放流などの環境保全活動をしっかり町民にPRすべきである。
 - ◆安平町には清流や池、沼に棲むザリガニ、小魚、エビ、カニ、ホタルなど、希少生物が生息する。これらの個体確認や周辺保護（開発規制区域）が必要である。

改革戦略



- ①地域住民による草刈り作業の実施（自治会への依頼、ボランティアの募集、町内企業との連携）
- ◆草刈ボランティアの後に、連携企業からの特典を得られるしくみがあれば、地域住民はもとより、フェイスブックなどの情報発信で町外からの参加者を募り、作業する人を増やすことができるのではないか。（鶴の湯入浴、牧場見学など）
 - ◆地域住民による草刈作業の実施
⇒子どもから高齢者が集まり作業することで交流が生まれるのではないかな。
 - ◆町と町民の協働による草刈り
⇒職員と地域が身近になることも必要。お互いに作業を行うことで交流が深まる。

経済産業ワーキンググループでは、8本のまちづくり戦略が検討されました。

成長戦略

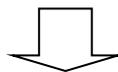
強み

多種多様な農業の展開（地産地消が可能でPRになる）

×

機会

6次産業化・農商工連携への関心の高まり



①地場農産物を商品化（開発・加工）できる人材や事業所の誘致

◆地場農産物を商品へ変換（開発・加工・商品化）できる人材や事業所が求められている。

⇒この人材・事業所（第2次産業）の誘致が必要。そのための創業支援・起業支援が必要。

例1：地場食材を活用した食事・料理提供（農家レストランの開業など）

例2：地場農産物を活用して「〇〇」という商品を作る加工事業者の誘致、起業

例3：地場農産物を活用して商品開発を行う人材の確保（地域おこし協力隊、経験者等）

⇒これらの人材が地域に定着することで、人口確保にもつながる。

②大規模経営体の設立促進

◆1次・2次・3次まで一貫して取り組むことができる大規模経営体の設立を促すことが必要である。

◆大規模化と個人経営の二極化になるが、国の流れでもあり、個人経営は新規就農等による定住も見込める。

③地場農産物のPRや購買意欲喚起など

◆あびらチャンネルを活用し、地元農産物や特産品の良さを町民に知ってもらい、購買意欲を喚起

◆地元農産物を購入できる農直の設置、地元給食での活用（地産地消・食育）の促進

◆個人事業者が立ち並ぶ市場、屋台村のような小さなショッピングモールの設置

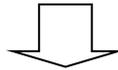
⇒屋台村のようなショッピングモール

例）知内町では、商工会青年部で専用屋台（道産木材）を製作。木材ということもあって、とても雰囲気が良い。統一感のある屋台がならぶと見た目の印象も良い。

・この専用屋台づくりを町内業者の冬期雇用の場として、活用していくことも一つの方法。

・町民手作りの屋台で、町の食材を活かした屋台村になると魅力も増幅すると思う。

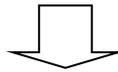
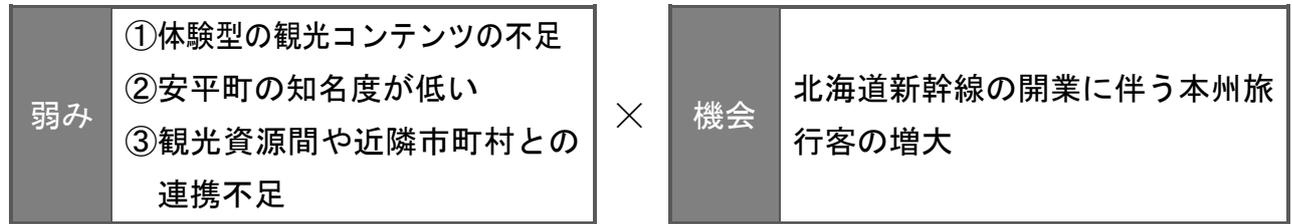
成長戦略



①生産者の顔の見える農業の実現（農直、農村レストラン、産直ツアー SNS・HP活用）

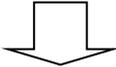
- ◆農産物直売所、農村レストランの整備・促進
 - ◆SNSやHPを活用した農産物PRなどの情報戦略を実現
 - ◆有機野菜、無農薬野菜のブランド化
 - ⇒これらを展開し、農産物の生産者の顔が見える化・詳細情報の確認を可能とすることにより安心して購入できる場の提供となる。
 - ◆農業体験ツアーの実施
 - ⇒首都圏から生産地である安平町に来てもらい、収穫体験のみならず学習の機会としたツアーの実施
 - ⇒ツアー参加者を対象とした勉強会などにより知識をつけてもらうことにより、さらなる安全安心に対する理解が深まる。
 - *実施主体や地域農家との連携等についての検討は必要
 - ◆収穫体験マップの作成
 - ⇒現状では、収穫体験が可能な農家は限られるため、農業体験ツアーと関連付けして、参加者数を安定的に確保することにより、重量作物で収穫作業が大変なカボチャなどで収穫体験を提供できるようになる。参加者は喜び、農家も助かることになるものであり、「ツアー参加者の確保」と「圃場提供農家の確保」の一体的な取組が効果的である。
- ※ 参加者の安定確保には、ターゲットが明確だと取り組みやすい。
- ※ 交流事業として動き始めた世田谷区との連携事業として、農業体験ツアーを具体的に検討することも良いのではないかな。

改善戦略



- ①安平町の知名度向上に向けたPR対策の強化
 - ◆新幹線に配置している機関紙等への広告PRもひとつの手法ではないか
- ②安平町の地域資源SLとのコラボ活動
 - ◆道の駅に設置するSLと新幹線とのコラボによるPRなど（新旧の演出など）を検討すると面白い。
- ③胆振広域や周辺市町村との連携による観光ツアー
 - ◆単一自治体での観光ツアーでは限界がある。周辺市町村との連携による魅力度を高める観光ツアーの開発し、誘客を促進する必要がある。
- ③北海道新幹線開業などによる道内観光客の増大を見据えた観光ルート開発
 - ◆空港や港に至近にある立地条件を活かし、『空港in・函館out』、その逆パターンなどの観光行程に、安平町に立ち寄ってもらうための観光ルートとなるよう取り組む。
⇒安平町に立寄ってもらうための観光スポット開発、既存資源のPRと売り込みが大変重要である。

改善戦略



①観光協会を主体としたコンテンツの開発

◆複合型体験を重視したコンテンツ開発

⇒農業、ウィンタースポーツ、カヌー体験などのコンテンツは、単発では弱い。しかし、複数の組み合わせることにより魅力が拡大するし、滞在時間の増につながっていく。

例) 複数の収穫体験 + α 要素 (収穫物の調理など)

芋ほり体験 + ふかし芋の食事、バター作りなど

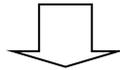
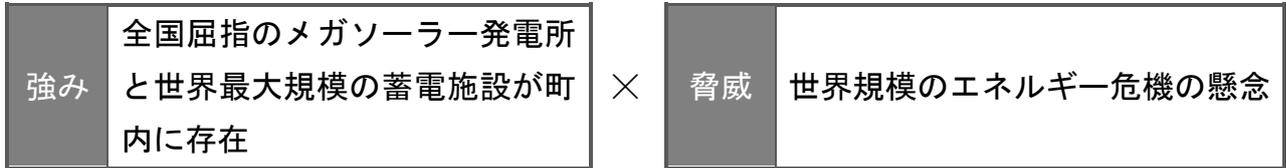
◆収穫体験マップの作成

⇒町内のどこで何が収穫できるかが一目でわかるマップの作成

⇒収穫体験が可能な農家の開拓や掘り起こしが必要



回避戦略



①自然エネルギーを活用した循環型社会の構築

- ◆水素エネルギーは、太陽光などの再生可能エネルギーで発生した電気から作り出す方法が、地球環境にやさしい方法とされている。
- ◆安平町は、大規模太陽光発電事業所の適地であり、集積地となっている。
- ◆そのため、水素エネルギーの備蓄、拠点となりえる地理的環境と可能性があることから、「太陽光発電→水素エネルギー製造→流通→消費」という自然エネルギーの循環、経済の循環を目指した水素エネルギー社会（次世代エネルギー社会）の先進地、モデルとなる町を目指すべきではないか。

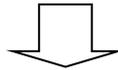
②自然エネルギーの普及啓発

- ◆電気自動車の普及促進
⇒公用車への導入、購入助成、電気ステーションの設置普及など

③自然エネルギーの地産地消

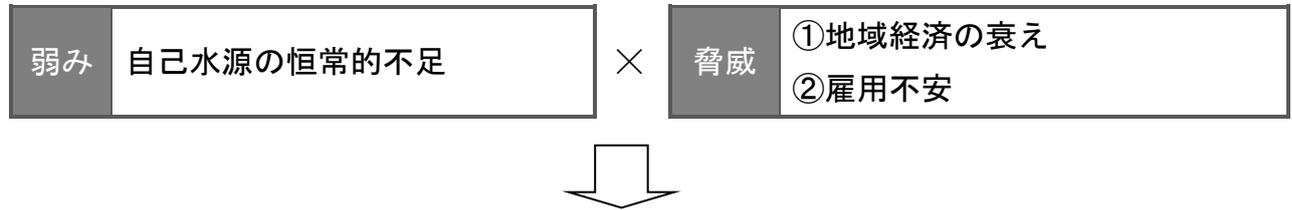
- ◆太陽光以外の水力、風力などの自然エネルギーの供給施設の設置を検討できないか
- ◆その財源として、他の自治体では「自然エネルギー住民ファンド」による取り組みを行う。（住民ファンド：町民が出資者となり資金調達を行う仕組み）

回避戦略



- ①子育て環境サポートセンターの設置（住宅、企業内託児所、ベビーシッター、晩御飯）
- ◆町外からの通勤者を取り込むには、子育て世代の労働環境整備が必要。
 - ◆これら取りまとめるサポートセンターを設置することにより以下のサポートの総合的な対応を可能とする。
 - ◆賃貸住宅から戸建て住宅等への住替えを促進
 - ⇒賃貸住宅（アパート等）から戸建て住宅（中古物件・住宅建設等）へ住み替えし定住できるサイクルを目指すこと。
 - ⇒町内企業を対象としたヒアリングを実施し、町外者のニーズ、実態調査をすることにより求められるサービス・環境を明確化する必要がある。
 - ◆企業内託児所
 - ⇒単独では難しい企業内託児所を複数企業により運営、子どもを安心して預けられる場所の提供。
 - ⇒ベビーシッター（一時預かりサービスの充実化）
 - ⇒晩御飯（仕事で忙しい母子家庭や若年層をターゲットとした給食サービスや惣菜の販売などで食事面をサポート

改革戦略



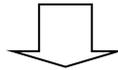
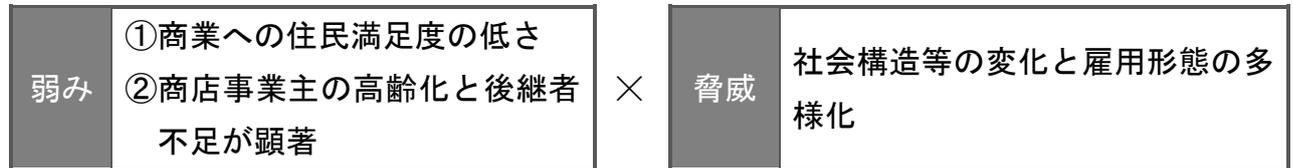
①ターゲットを絞った企業・事業所の誘致(水を使用しない事業所等)

- ◆情報通信技術を活かし、自社の本拠以外で業務、勤務ができるサテライトオフィスをはじめ、IT系事業者、コールセンター、倉庫業など、ターゲットを絞った企業・事業所の誘致を行うべきだと考える。(厚真町で実施中)

②起業、創業に向けた独自支援の検討

- ◆長年低迷する北海道経済や近年の企業進出状況を考慮すると、町内で大きな雇用を生む大企業の誘致は厳しい状況にある。
- ◆そのため、町内に不足する業種など、町が求める業種や事業所を呼び込むための起業・創業支援を行っていくことが、向こう10年間の安平町の雇用対策となるのではないかと考える。
 - ⇒ 将来的な地域雇用や地域活性化へつながるものとする。
 - ⇒ 起業と創業を促進させるため、国の事業とは別に町の独自支援策の検討

改革戦略



①新規コミュニティビジネスの検討

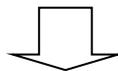
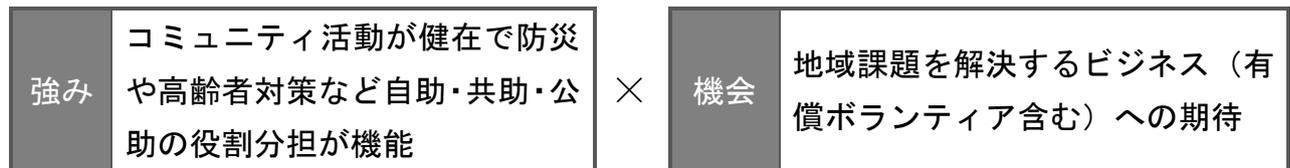
- ◆後継者問題を考える前提として、事業が成り立つことが求められる。
- ◆問題点として、後継者・新規起業を募集していることを伝えられていない現状があり、情報発信が重要である。
- ◆経営を成り立たせるためには、町外者も顧客として取り込んでいくことが事業成立に大きく左右する。
- ◆複数店舗が入る複合型施設として起業させる方法もある。

※ 現商店の活性化については、入店しやすい仕組みづくり（ニーズ調査、口コミ等の情報発信による利用促進策）が重要ではないか。

※ 追分地区の商店街は後継者が不足し、現状でも非常に厳しい状況にあることを認識する必要がある。

健康福祉ワーキンググループでは、3本のまちづくり戦略が検討されました。

成長戦略



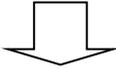
①ボランティアとビジネスに関する考え及び方針について

- ◆地域コミュニティによる見守り活動・高齢者対策の実施という強みがビジネスにどのように結びつくかを整理した。
- ◆有償・無償関わらず「ボランティア」と名の付くものと、労働は別のものであるということを意識が必要。
- ◆「ボランティア」は、する側の気持ちにより行われるものであり、する・しないに自由性があるため、対価や責任があるビジネスとは異なる。
- ◆福祉の大きな課題である生活を支える・命をつないでいくことに対して、自由にやめられるボランティアを活用することは難しいと考える。必要な対価を払う労働の補助的なものとして捉えなければならない。
- ◆地域課題を解決するために新たな事業体を立ち上げることは、現状では難しい。しかし、既存のシルバー人材センターは、高齢者の活躍だけでなく、地域課題解決への可能性があるため、これらの延長線上で解決されていく可能性がある。
- ◆介護分野ではケガの補償も問題になっており、直接的介護ボランティアは縮小傾向。
- ◆町内会役員の担い手不足解消のため、役員手当（有償ボランティアとして）の導入やボランティアの登録制についても検討する必要がある。それには取り仕切る団体が不可欠（NPO法人など）

上記について、行政において検討を行いました。

- これまでボランティアにより福祉行政を支えてきた方々は既に高齢化。向こう10年で大幅に減少することが予想される。
- また、労働者の定年延長などもあり、ボランティアの担い手が不足している。
- 一方、高齢者の数は、今後10年は増加する予測であり、サービスの需給関係が成り立たなくなる深刻な状況となることが予想される。
- これを打開するためには、ビジネス⇒有償ボランティア⇒無償ボランティアの領域を区分した上で、解決するための仕組みづくりが喫緊の課題であると認識する。
- 「社会福祉協議会」や「シルバー人材センター」など既存団体の活用や、NPO法人などの立ち上げなど、提供者と受給者の調整役を育成していくことが必要となる。
- 買い物対策を含め、商店街との連携も必要となる。
- 手遅れとなる前に、人材育成及び団体育成に取り組むことが急務と認識する。

改善戦略



①地域公共交通の再編

- ◆ 現行のデマンドバスは行き先指定であり、他の公共交通との連動性もないため不便という声があり、見直しが必要ではないか。
- ◆ 民間ハイヤー事業者は過疎地域では「公共交通」に近い位置づけであり、将来的にも維持していく必要がある。そのためタクシー利用者への助成制度などを創設し、利用者を増やしていくことも検討するべきではないか。（結果、地域雇用を守ることになる。）
 - * 当町では既に福祉事業としてタクシー利用者助成制度が存在することに留意
- ◆ 市街地間を結ぶ循環バス復活を求める声があるが、アクアバスは温水プール利用者限定であり、乗車できない。全体的な変革が求められている。
- ◆ さらに、子どもだけで部活、社会教育活動やイベントに参加できる交通機関も必要であると考えます。

改革戦略

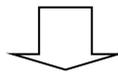
弱み

医療機関（総合病院）の整備が望まれている

×

脅威

人口減少社会の到来と少子高齢化の進行



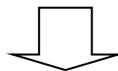
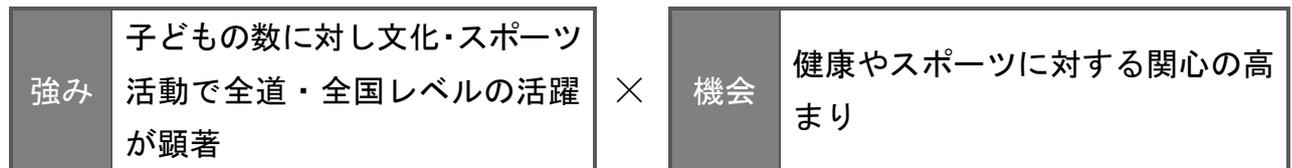
①健康寿命延伸事業

- ◆急速な高齢化による医療費の増大が、当町の国民健康保険運営で大きな課題
- ◆医療機関にかからない健康な体を維持するため、高齢者になる以前からの健康管理が必要である。
- ◆第1回目の町民まちづくり会議でも出ていた意見であるが、「自分の体は自分で守る」という考えを町民に浸透・醸成させていく必要がある。



子育て・教育ワーキンググループでは、8本のまちづくり戦略が検討されました。

成長戦略



①スポーツ活動の推進（指導面・交通面によるサポート）

- ◆少子化に伴い、追分・早来合同でスポーツ少年団や部活動が行われている種目があり、『移動手段の確保』が必要である。
- ◆地域における指導者はいるものの、種目によっては指導者不足となっているため、安平町出身の橋本聖子さん等とのつながりを活かし、競技経験者を指導者として招くなど指導者の確保が必要。
⇒ 指導者の養成、人材誘致を行っていく。

②スポーツ合宿の誘致、大会の誘致

- ◆チームや選手の送迎をはじめ、地域や民間を巻き込んだ合宿受入体制の整備を進める。ただし、現在の施設では十分なキャパシティがないことに留意する必要がある。

③推奨スポーツの選定

- ◆町で推奨スポーツを選定し、指導者や選手に手厚い支援体制を構築する。
- ◆推奨した種目に特化した施設の改修を重点的に実施する。

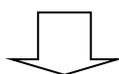
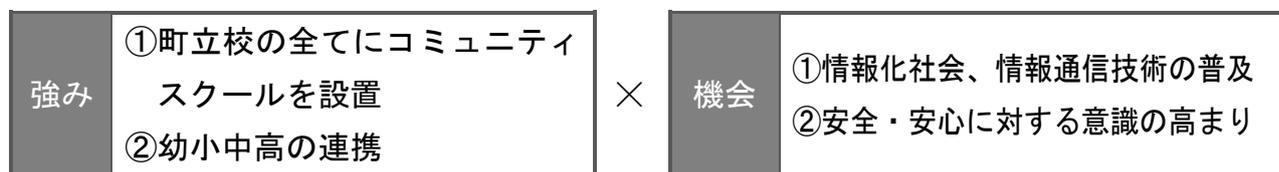
④スポーツ活動経験した出身者によるふるさと納税への期待

- ◆スポーツ活動で大きな支援を得て町外へ羽ばたいた若者は、ふるさと教育によって芽生えた郷土愛を持つ。ふるさと納税へとつなげ、次世代の選手育成に活用する。

※ 文化について話し合いができなかった。

※ ①～④は様々な年代のターゲットをひと括りにしている。ライフステージに合わせた対応が必要であり、子どもと成人は基本的に分けて整理すべき。

成長戦略



① ICTを活用した情報の配信

◆町内限定のSNS

⇒スマートフォンアプリを活用した情報の配信。これにより、保護者や町民を対象にスピーディな情報提供が可能となる。

実例) 追分小学校では、試験的にスマホを活用して登録者へ情報配信を実施。

② 英語教育の推進

◆幼少期からの英語教育の推進

⇒小学校低学年での英語必修化や教科化を見越し、幼少期から気軽に英語に触れる機会を作るとともに、ALTの取組み強化により、英語力の強化と将来的にグローバルに活躍できる人材を育てられるような取組みを推進

⇒外国での英語経験事業として、小4～中3の間に、数日間ほど外国で生の英語を体験できる事業、挑戦することで、安平町が新千歳空港に至近という地理的条件を活かすことで、世界へつながりをアピールできる。(選ばれるまち)

*当町へのインバウンド訪日の増への寄与にも期待

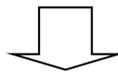
③ 交通アクセスの向上 (南千歳へのバス運行)

◆通勤、通学を考えると、南千歳へのバス運行が必要

⇒商業の町外流出という考えもあるが、子育て・教育分野に重点をおくのであれば、プラスと捉えて必要であると考え。

(「防災教育の推進」として平成28年度に行った事業の話し合いがありましたが、掛け合わせが異なるため最終回のワークショップにおいて削除しています。)

改善戦略



①全天候型施設の整備

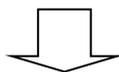
- ◆安平町には、雨天・冬季間に子どもが遊べる施設がない。大きなドーム型施設ではなく、既存の施設や園庭に屋根を取り付けて利用するなど、子ども達の遊び場の確保について検討が必要。なお、検討にあたっては、親の意見だけでなく、子どもの考えを反映するべき。

②多目的競技ができる運動施設

- ◆体育館開放事業等を行っているが、大きな大会誘致や合宿誘致では会場の確保が課題となる。また、団体利用が多く個人利用で使える場所がないことも課題である。
- ◆既存の運動施設もあり、財源の問題、利用ニーズ、必要性の有無など問題はあがるが、人が利用することでにぎわいが創出されることを念頭に、運動施設の整備検討ができないか。

※ 上記①と②は、いわゆる箱物（特に大型建設事業）整備であり、建設の判断を含めて慎重にお願いしたい。あくまでも、この戦略ではアイデアとして出しているものもあり、当戦略を計画に掲載できるのかどうか、しっかりと議論した上で判断いただきたい。

改善戦略



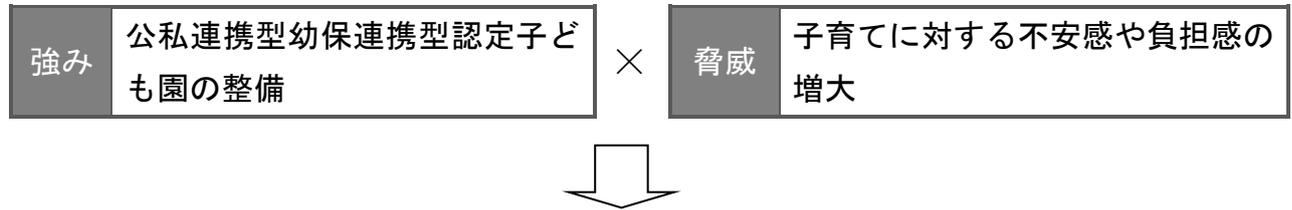
① ICT等を活用した学校間交流の取組み

- ◆他市町村の学校や園とのICTを活用した交流（移動不要）
 - ◆町内学校間の長期交流通学
 - 例) 早来小学校⇔追分小学校 地域を活用し学校間合宿の実施
 - ◆町内（早来・追分）の小中学校が行事やスポーツ大会等に参加し交流する
 - 例) 学校対抗運動会⇒学校行事として全員参加
- ※ICT教育を進めるには、学校の先生方のスキルも必要。

② ICT教育の推進

- ◆至近に立地する千歳科学技術大学との連携
 - ⇒将来的に小中学校において連携したICT教育の取組みに「選ばれるまち」「未来を担う子どもの育成」の面で大きな可能性がある。
 - ⇒IT企業の誘致によるICT教育の推進の可能性などを検討するべき。
 - ◆ICT教育の推進に向けたICT教育に精通したコーディネーターの配置
- ※ 外から来る人にとっては、弱みの『学年1学級しかない』ことは大きい懸念材料であり、対策が重要だと思う。

回避戦略



①子育てに対する不安感・負担感の縮小に向けた取り組み

- ◆社会一般論として子育てへの不安感・負担感が叫ばれているものの、現場ではこうした声はそれほど大きなものではない。
- ◆不安感は、実は小さな事象を未然に対応することで改善するものであり、現代の子育て世代が所有するスマートフォン（LINE等）を活用し、園や保護者との情報共有・連携を図ることで、子育てに関する不安や負担の解消を図っている。（子ども園）
- ◆子ども園に子どもを預けているという「他人任せ」の考えを持つ親もいることから、そういった親の意識改革に取り組む必要がある。

②子育て支援拠点施設の一元化運営

- ◆子ども園、児童館、子育て支援センターを一括して民営化することで、円滑な運営、安心な体制が構築可能である。

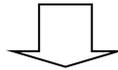
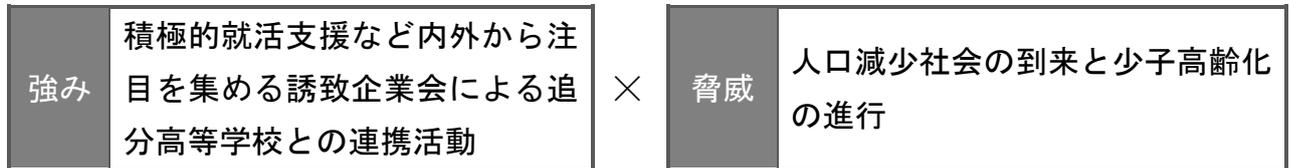
③子育て世代の獲得に向けて

- ◆質の高い特色ある保育・教育サービスを提供できる環境をPRし、町外から子育て世代を呼び込むことが重要である。⇒結果として定住に結びつく。（広域保育）

③世代間交流、地域との交流事業の取り組み

- ◆地域の高齢者が子ども園に赴き、子ども達と一緒に食事（田舎食堂）をとるなど、世代間・地域との交流を図る取り組みを進めることで、ふるさと教育に寄与するとともに、若い子育て世代に安心感も生まれることが期待される。

回避戦略



①追分高校存続に関連する施策

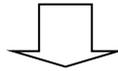
- ◆追分高等学校へのコミスクの導入
⇒幼小中高でのコミスク導入の可能性へ向けて
- ◆町内小中学校へ追高の情報発信が必要（進学先、就職先の紹介）
- ◆町内に留まってもらうための資格取得等支援（福祉、子育て関連の仕事）
- ◆短期的な就職率ではなく、「就職率100%⇒5年後の離職率0%」などを目標とし、一人ひとりに合った就職支援を行う。
⇒追高生に限らず、現代の学生は離職率が高いのも現状であり、そのため、進学・就職率100%はもちろんのこと、5年後の離職率が低くなるよう、その生徒にあった就職先の支援が必要。
⇒離職率が低ければ、受け入れる企業側の「追高生」に対する印象も良くなり、次の採用につながり好循環にもなる。
- ◆地元就職枠の取組み（役場・農協・銀行など）
- ◆就職先として、魅力ある企業があることをアピールする。
- ◆給食の提供（給食センター以外での方法）
⇒給食センターは配食数の上限等もあることから、給食センター以外での現実的な方法について検討（親に対する訴求力）

改革戦略

弱み 学校施設の老朽化

×

脅威 人口減少社会の到来と少子高齢化の進行



①学校の統廃合（老朽化）や小中一貫教育の取組み

- ◆学校の選択制の導入検討（子ども保護者による選択）
- ◆児童生徒数の減少により、向こう10年間において、学校の再編議論は避けて通れないと思われる。

[早来地区]

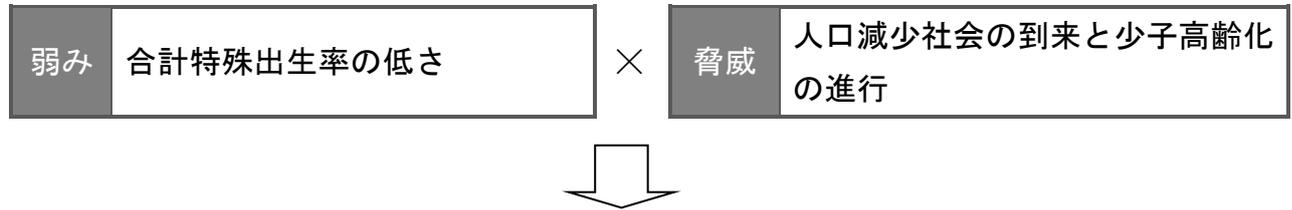
早来地区小学校の統廃合

[追分地区]

小中学校の連携、一貫的な教育による取組みを促進



改革戦略



①婚活支援活動の取組み

- ◆婚活支援に限ったことではないが、これは行政ではなく核となる人が必要
例) 地域おこし協力隊、有償ボランティア、おせっかいおばちゃんの活用など
- ◆若い人同士と一緒に活動する機会、何かをする機会の創出が結婚につながる。
⇒婚活や合コン事業では、若い人も抵抗がある。
⇒婚活、合コンを前面に出すのではなく、若い人同士と一緒に活動する機会、何かをする機会を創出していく取組みが現実的な取組み
⇒若い人同士と一緒に時間を共有した先に、マッチングが生まれてくるものであり安易に支援活動を行政が行えば失敗する。

②多子世帯への支援（住宅、金銭面）

③合計特殊出生率について

- ◆合計特殊出生率は、全国的にも低く安平町だけの弱さではない。
- ◆この率を気にする必要はないのではないか。
⇒重要なことは、子育て世代に選ばれること。
⇒中古物件や宅地、子育て支援策の紹介など、定住をコーディネートできる人が必要であり、長い行政経験と多くの行政情報(支援制度や町の情報等)を知っている再任用職員を定住コーディネーターとし活躍してもらう体制とするなど。
- ◆視点を変えた目標設定が必要
例) 目標：『子育て世帯 5世帯を呼び込む』などの目標設定

行政運営ワーキンググループでは、4本のまちづくり戦略が検討されました。

成長戦略

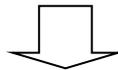
強み

まちづくり基本条例・町民基金
の設置

×

機会

地域課題を解決するビジネス（有
償ボランティア含む）への期待



①町民が主体となり活動し、ふれあい、交流できる場の整備

◆町内空き店舗や遊休公共施設を有効活用し、町民主体で活動できる場所を整備。お年寄りなどの買い物対策として、デマンドバスを活用する。（施設は行政が整備し、運営は町民）

⇒住民主体（主体性を持たせる）により、それぞれの地域で抱える課題（住民不安）を解消できる場であるべき。～住民参加型コンパクトシティ

⇒町民が自由に集え（コミュニティの場）、ニーズに応じていくらかでも作り変えられるもの。

⇒その施設には保健師が常駐し、高齢者のコミュニティの場や子どもと高齢者の交流の場など、いろいろな機能を持たせる。（病院を取り込んだサービスも重要）

⇒高齢者が外に出てきてもらえるよう、足の確保（有償によるカーシェア）を図るなど、地域の人同士でお互い助け合い集まるという形にすべき。

⇒分散している人を動かす手段として、地区ごとに複数設置することも検討

⇒地域課題を解決するネットワークを構築

②福祉系NPO法人等の誘致など

◆老人福祉事業者が不足する中、NPO法人や有償ボランティアなどによる福祉企業の誘致（可能であれば医療機関を含む。）により、都会の退職者（富裕層）をターゲットにして定住へとつなげることはできないか。

③有償ボランティア等の組織づくり

◆買い物のお手伝いなど高齢者を手助けできる有償ボランティア組織づくりと、高齢者から子育て世代へのアドバイスなど、お互いに協働する仕組づくり

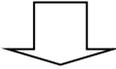
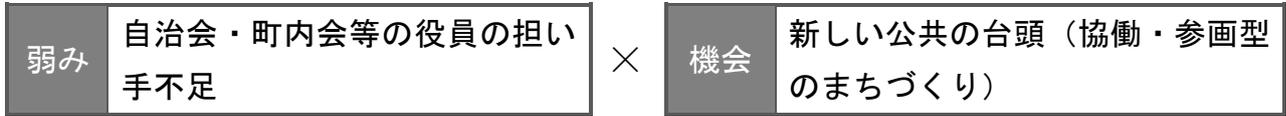
◆小さなことやいろいろな課題を総合的に対応していく組織（地域課題をまとめて対応する総合商社的な組織）が今後必要となるのではないか。

◆行政（役場）にも、このような横断的に対応できる部署があっても良い。

⇒協働参画の推進組織が設置されれば行政と町民の役割分担が可能となり、結果として行政コストが削減されるものと期待する。

※ 10年後に活動できる人材の確保が困難になると予想され、有償ボランティアではない方法

改善戦略

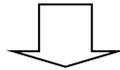


①自治会・町内会活動の担い手不足の解消に向けた取組み

- ◆コミュニティのあり方が社会的に変化している。
 - ◆自治会・町内会の存在意義を再確認することが必要である。
 - ◆自治会の所掌範囲の見直しにより、役員等の負担軽減を図るべき。
 - ◆将来的に再編は検討するべき時期がくるかもしれないが、安易に自治会の再編をするのではなく、自治会が行う業務の整理、見直しをすることから始まるべき。
 - ◆転入者は自治会町内会への加入に対してハードルがあるし、社会的な流れからは、自治会町内会の存在意義が問われている背景があることから、転入者や若者世代に対して自治会活動への参加のきっかけづくりが必要
 - ⇒生活に必要不可欠な「防災」をきっかけに進めることや、イベント開催日の検討など参加しやすいきっかけづくりに取り組む。
 - ⇒若い人の都合に合わせ自治会行事を行うことで、顔見知りとなり活動の輪を広げる（お互いの気配りが必要）。
 - ◆複数自治会による行事の共同実施
 - ⇒重複している行事の整理。子ども会行事の合同開催など
 - ◆地域サポート制度の充実
 - ⇒職員や企業による有償ボランティア制度、行政ポイント制度等による地域コミュニティへの参加など
- ※ 協働のまちづくり（まちづくり基本条例）について、町民に理解されていないので具体的に説明する機会が必要（広報だけではだめ）。それが浸透することで、自治会等として何ができるか明確となり、動きやすくなる。

行政・企業・自治会町内会などによる協議の場の設定が必要

回避戦略



①町外から町内への通勤者を定住させる取組み

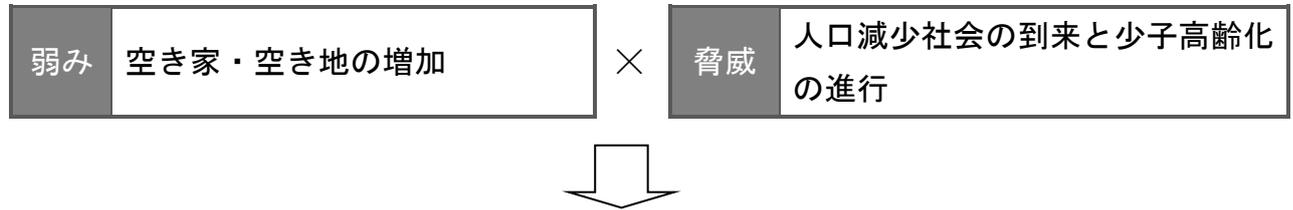
- ◆企業の社宅建設助成制度の創設など町外在住の従業員を転入させる施策
- ◆通勤・通学している町外者1,800人が町内に住まないのは住宅事情(家賃、物件数等)にあると考えられるため、ニーズ調査や企業への需要調査などを行う必要がある。
- ◆町内に空き家も目立ち始めているので、それらの再利用やリフォーム助成などの検討も必要
- ◆このような制度があるという情報発信も重要

②定住対策と再生可能エネルギーの連動

- ◆町内にはメガソーラー発電所の整備や世界最大規模の蓄電施設が設置されていることから、これら企業と連携し、再生可能エネルギーを利用した住宅建設の奨励ができないか。広がりを見せれば「電気代の軽減」にもつながり、これをPRすることが可能となる。(生活に直結するような材料はPRにつながる)
- ※ なお、ソーラー発電所の増加で美しい景観が阻害される現状があり、自然環境の保全、景観保全の観点から、何らかの対策が必要になる時代となる。(丘陵地帯の喪失)



改革戦略



①空き家の利活用

- ◆高齢者は持ち家を維持することが困難となる。今後更に空き家の増加が予想されることから、高齢者が住み替えできる施設があることを前提に、空き家の有効活用を検討していく必要がある。
- ◆空き家の循環型利用の流れを構築すること。
例) 高齢者居住の住宅→維持が困難→安価に若者世代へ売却・賃貸の流れ

②空き家有効活用のための補助金制度導入

- ◆町外からの通勤者等の誘致のため、中古住宅購入時や企業が空き家を社宅として利用する際に助成するもの。これらは定住対策にもリンクする。

③住宅情報の一本化や情報発信の強化

- ◆町ホームページ、あびらチャンネルを活用した情報発信
- ◆専門家（専門担当者）の配置

④教育と連動した定住対策の取組みについて（意見）

- ◆将来像では、最重点ポイントを「子育て・教育」として進めることとしているが、「子育て・教育」だけでは、安平町のターゲットに突き刺さらない。
- ◆そのため、空き家活用などの定住対策とセットで「子育て・教育」に取り組まなければいけない。

資 料 編

～ワークショップで話し合われたまちづくりのヒント～

第1回目の町民まちづくり会議で話し合われ、付箋に書き記された言葉には、10年のまちづくりに必要となる課題やヒントが記載されています。

安平町ってこんな町(住んでみて・活動してみて感じた「良いところ」と「改善すべきところ」)

区 分	良いところ	改善すべきところ
生活環境	<input type="checkbox"/> 高速道路のインターチェンジがあり、空港や都市に近く車があれば便利。 <input type="checkbox"/> 北海道らしい風景が広がり自然が豊かで健康的にのんびり過ごせる(住み続けたい。帰ってくるとホッとする)。 <input type="checkbox"/> 田舎らしさがある。 <input type="checkbox"/> 土地が安価で、気候も良く、災害など少ない。 <input type="checkbox"/> 食べ物もおいしい。 <input type="checkbox"/> 希少動物が身近にいる(エゾモモンガ、カブトムシ)。 <input type="checkbox"/> 身近な場所に遊びに行ける自然公園がある(ときわ公園・鹿公園)。	<input type="checkbox"/> 情報インフラが遅れている地域があり、改善が必要。 <input type="checkbox"/> 人が集まる場所にはWifi整備が必要。 <input type="checkbox"/> 地域公共交通が不便で、空港・港の近さが活かされていない。 <input type="checkbox"/> 道路の草刈が行き届いてない。 <input type="checkbox"/> 水道料金の負担が大きい。
産業観光	<input type="checkbox"/> 雇用が少ないと言われている割に工場は町内に立地している。 <input type="checkbox"/> 農業が盛んで、農家の職人技がある <input type="checkbox"/> 競馬ファンに注目されている。 <input type="checkbox"/> 近隣市に商業施設があり買い物に便利	<input type="checkbox"/> 商店街に活気を感じない。 <input type="checkbox"/> 徒歩で買い物ができない。 <input type="checkbox"/> 安平町の知名度が低い。 <input type="checkbox"/> 情報発信が不足(町の情報が分らない) <input type="checkbox"/> 農業を守るべき。
福祉介護	<input type="checkbox"/> 高齢化率は高いけれど、元気な高齢者が多い。 <input type="checkbox"/> 地域での見守り・声かけがある。	<input type="checkbox"/> 医療機関(総合病院)が少なく将来不安 <input type="checkbox"/> 車が運転できなくなった場合に不安
子育て教育	<input type="checkbox"/> 子どもの挨拶が良い。 <input type="checkbox"/> 子どもが安全・安心に暮らせる環境 <input type="checkbox"/> 通学には便利な立地 <input type="checkbox"/> 乳幼児の検診が充実している。 <input type="checkbox"/> 児童・生徒が少なくきめ細かい指導	<input type="checkbox"/> 雨天に子どもが遊べる施設がない。 <input type="checkbox"/> 子ども数が減少し弊害が大きくなっている(PTA活動、子ども会活動、スポーツ活動)。 <input type="checkbox"/> 外で遊んでいる子が少なくなった。
文化・スポーツ	<input type="checkbox"/> 他の町に無いスポーツ施設(スケートリンク・スキー場・屋内プール)が充実。 <input type="checkbox"/> 文化的に優れている。 <input type="checkbox"/> SLの保存状態が良い	<input type="checkbox"/> 総合体育館が必要ではないか。 <input type="checkbox"/> せっかくゴルフ場が多くあるのだからもっと活用したら良いのではないか。 <input type="checkbox"/> 少年スポーツ活動の送迎が難しい時代。
地域コミュニティ	<input type="checkbox"/> 気に留めてくれる、協力してくれる暖かい人が多い。 <input type="checkbox"/> 人が温かい。 <input type="checkbox"/> コンパクトなまちだからこそ知り合いになれる人が多い。	<input type="checkbox"/> 早来・追分の意識が強く、地域間に壁がある。 <input type="checkbox"/> まちに活気がない(若い人少ない・イベントが少ない・町民運動会ない)。 <input type="checkbox"/> 活動する人、依頼される人に片寄りがある。 <input type="checkbox"/> これまで尽力された地域団体の役員が高齢化し、団体存続すら危ぶまれている。 <input type="checkbox"/> 町全体が新しい取組みに消極的。
行政運営	<input type="checkbox"/> 行政の各種サービスは手厚いと思う。	

10年後に安平町がどのようなまちであるべきか、どのようなまちにするべきか「目指すべきまちの姿を考える。

①究極の目標	
「〇〇なまち」	意見
安心できるまち	<input type="checkbox"/> 町内会の結束、自らの環境整備（除雪・除草・周りの協力）
居心地の良さが感じるまち	<input type="checkbox"/> 人と人との交わりを大切にしていけるべき
たのしいまち	
安全安心なまち	
自然の美しいまち	
活気のあるまち	
多くの人を訪れる活気あるまち	<input type="checkbox"/> 馬で有名なので、もっとうまく町をPRできればいい
時間が緩やかに過ぎるまち	
生活がしやすいまち	<input type="checkbox"/> 現代社会は、共働きで（働き口が）ないと暮らせない（経済的な裕福さを求める社会。人口を維持して良くするためには仕事と暮らしやすさがセットである必要がある） <input type="checkbox"/> 日用品が購入可能な中型商店は必須 <input type="checkbox"/> 閉店が早く、急な来客時に困る
今くらい自然のあるまち（程よさ）	<input type="checkbox"/> 人が住むために環境を破壊しないでほしい
最低限今くらい住みよいまち	<input type="checkbox"/> 一通り揃っているまちで生きている
静かで都会的なまち	<input type="checkbox"/> 静かで都会的＝垢抜けている（おしゃれ）
ゆとりのあるまち	<input type="checkbox"/> 経済的に豊かでゆとり（時間的ゆとり）を持って暮らせるまち
経済的に豊かでゆとりを持って暮らせるまち	
生きることを楽しめるまち（A1に勝てる）	<input type="checkbox"/> 20年後今の仕事なくなる。ロボットに仕事を取られていいのか？生きがいのあるまち。楽しめるまち
助け合えるまち	
（安）心が（平）穏やかになるまち	<input type="checkbox"/> これは外せない。
ここでよかったと思えるまち	
人口が減っていないまち	

②より具体的な目標		
区分	「〇〇なまち」	意見
高齢者に関する こと	元気な年寄りのまち	<input type="checkbox"/> 寝たきりにならないような運動事業や医療体制を構築すべき <input type="checkbox"/> 在宅介護の充実
	若い人との交流が多いまち	
	高齢者と若者が住み続けられるまち	
	高齢者が安心して暮らせる医療・介護の充実したまち	<input type="checkbox"/> 若い人も医療は大事だが、高齢者にとっても医療機関の確保により、安心できる在宅での介護に繋がることが望ましい
	健康長寿のまち	
	老後安心して生活できるまち	<input type="checkbox"/> 高齢者においては、町内公共交通に対し不便であると感じている。代わりとなる交通手段の検討が必要
	老人に優しいまち	
	老人の住みやすいまち	
	歳をとってもイキイキ暮らせるまち	
	歳をとってもこのまちで死ぬるまち	
	老人も楽しく生きられるまち (高齢者を活用する)	
	地域に居場所があるまち(高齢になっても社会貢献)	<input type="checkbox"/> 若い世代の集まる場があれば高齢者との交流も可 <input type="checkbox"/> 集まれる場所(食を目的・作ることも) <input type="checkbox"/> 世代・年代を問わず集まれる場所があると良い <input type="checkbox"/> 親を呼び寄せても居場所がある <input type="checkbox"/> 地域に入り込める場所 <input type="checkbox"/> 引きこもり防止
	じいちゃん・ばあちゃんが元気で働いているまち	<input type="checkbox"/> 元気で働く⇒健康に繋がる
	高齢者と子どもの交流があるまち	<input type="checkbox"/> 通学時に声をかける
安心して死ぬるまち	<input type="checkbox"/> 安平町内で最期まで穏やかに過ごせるまち	
子ども、若者、子育て世代に関する こと	子どもの笑顔が絶えないまち	<input type="checkbox"/> 安心して子どもを産めるまちなど(貧困率)
	小中高校生が常に団地内を歩く姿が見えるまち	<input type="checkbox"/> 持続可能⇒若い人が生活でき、起業できる体制 <input type="checkbox"/> 多様性のある子どもを見極める
	他の町より1.5倍子どもが多いまち	
	子ども・若者の多いまち	<input type="checkbox"/> IT産業など、若者のニーズに合った企業の誘致
	子どもたちが安心して暮らせるまち	<input type="checkbox"/> 子どもが集まりやすい公園はどのようなものか判断する⇒子ども中心に考える <input type="checkbox"/> 整備された公園があると良い。皆が集まれる場所が必要(大島山林などせっかくありながら、整備が行き届いていないのは残念)
	皆で子育てするまち	
	サケの古里のまち	<input type="checkbox"/> サケの古里⇒巣立つ子どもたちが安平町へ帰ってくることをイメージ化したもの(帰りたいと思えるまち)

②より具体的な目標		
区分	「〇〇なまち」	意見
子ども、若者、子育て世代に関すること	子どもたちがあふれるまち	<input type="checkbox"/> 上士幌町のようにふるさと納税の用途を明確化するなど、政策を集中させることでアピールにもつながる。
	子育てがしやすいまち	
	安平町に子どもたちが住み続けられるまち	
	若者が住みやすいまち	<input type="checkbox"/> 病児保育の対応（受給関係が課題） <input type="checkbox"/> 子育てボランティア⇒施設 <input type="checkbox"/> 働くための体制整備が必要 <input type="checkbox"/> 0歳から子どもを預かってもらえる所 <input type="checkbox"/> 要支援児への保育
	安心して仕事と子育てを両立できるまち	
	若者が活躍できるまち	<input type="checkbox"/> 活躍の場＝働く場所 <input type="checkbox"/> 同級生が都市へ流出。働く場所・産業があればいい
	外で元気に子どもたちが遊んでいるまち	<input type="checkbox"/> 昔は道路で、外で遊んでいた <input type="checkbox"/> 子どもの姿が見えるまち <input type="checkbox"/> 保育園と中学校が連携し、生徒が園児の面倒をみるなどの一体となった取り組みにより、育ちの連続性を生む <input type="checkbox"/> 三世代がうまくいくと皆が活きる <input type="checkbox"/> 子育ては力を入れて人口が増えている事例がない ⇒学力・体力に強みのある小中学校・園があると人が流れてくる <input type="checkbox"/> 学校帰りに歩いていける場所があればいい （習い事や少年団など）
	保育園から中高が一緒のまち（教育一貫性）	
	教育と子育てで選ばれるまち	
	子どもの放課後の活動が充実しているまち	
	子どもがあふれるまち	
	子どもたちが夢を持てるまち	<input type="checkbox"/> 全道・全国区のスポーツは多いことから、オリンピックを目指す選手のサポートなど <input type="checkbox"/> いいものを見る。聞ける。感じられる。 ⇒一流の人が体感できる。目標ができる。本物を見せて夢が持てる <input type="checkbox"/> 競技の選択肢が広がる環境があると子ども達が伸びる。 <input type="checkbox"/> 一芸に秀でている人として育てば。
	オリンピック選手をたくさん出すまち	
子どもたちの長所が伸ばせるまち		
若い家族・世帯がたくさんいるまち	<input type="checkbox"/> 若い人が集まる。子どもが増える ⇒高齢者との繋がりが出来る <input type="checkbox"/> 町の将来を担う若年層が、町内に残ってもらうことが、及び学生や就職で転出して結果的に戻ってきてもらうことが重要 <input type="checkbox"/> 今いる若者を逃がさない ⇒子どもの遊び場の確保（子育て世代） ⇒人がいるから出来ることも増える	
若者達の賑わうまち		

②より具体的な目標		
区分	「〇〇なまち」	意見
子ども、若者、子育て世代に関すること	子どもが安心して遊べるまち	<input type="checkbox"/> 保護者は、子どもが安心して遊べる場所があるなどを条件としてまちを選択しているのではないかと
	しっかりとした人間力の育つまち	<input type="checkbox"/> 子どもが望む学校環境・公園を整備する ⇒外にPRすれば人が増える
地域コミュニティ	行政と住民が相互に信頼しあえるまち	<input type="checkbox"/> 住民同士の助け合いがこれからも必要 <input type="checkbox"/> 住民自らまちをきれいにするキャンペーンを実施 <input type="checkbox"/> 自治会町内会の加入率を上げる <input type="checkbox"/> 公共交通の強化で交通弱者をなくす <input type="checkbox"/> 若者が住み続けるということは、職場が必要であり、工場等の誘致に力を入れるべき
	ルールを守るまち	<input type="checkbox"/> 社会常識や社会ルールを守れない住民が増加している。ルール強化が必要なのだろうか
	10年後も安平町（再合併しないまち）	<input type="checkbox"/> 合併10周年を検証することが必要 <input type="checkbox"/> 合併してよかったと言われるようにしたい
	合併してよかったと思えるまち	<input type="checkbox"/> 地域間の壁をなくす工夫が必要
	みんな仲良いまち	<input type="checkbox"/> 仲の良いまちにしたい。また、地域の意識が強い部分もある。早来地区・追分地区という隔たりを感じるため、一体感醸成のために交流の場などがあればよい
	暮らす人々が役割（コミュニティから頼られる実感）を感じられるまち	<input type="checkbox"/> 日常の暮らしの中で、周りの人々に必要とされる関係性がほしい。具体的には自治会や各種コミュニティにおいて、役割を持ち頼られることが生きがいに繋がる ⇒自分の得意分野の共有。仲間づくりの見える化 ⇒必要とされることが生きがいに
	町内イベントが盛り上がるまち	<input type="checkbox"/> 「うまかまつり」以外にも盛り上がるイベント・祭り ⇒縮小している
その他	自然と食が豊かなまち	<input type="checkbox"/> 安平町は誰が見ても第一次産業のまち。地産地消、自給自足が可能なまちを目指すべき
	スタバができるくらいのまち	<input type="checkbox"/> スタバ、企業が入ってきているまち（⇒スタバに選ばれる＝便利でおしゃれなまちの象徴） <input type="checkbox"/> アルテピアッツァ美唄のような文化的なおしゃれな施設
	循環するまち（エネルギー、地域通過、食材）	
	森や川など子どもが安全に自然と親しめるまち	<input type="checkbox"/> 本格的な森や川ではなく、整備された公園を想定（川に入れる。アスレチックが森の中にあるような） <input type="checkbox"/> 滝野すずらん公園のミニチュア版がほしい ⇒子どもの遊び場
	ほっとできる景色が残っているまち	<input type="checkbox"/> 都会から戻り、自然や町並み等落ち着いた環境がある
	町民の手づくりが見えるまち	

③目標を達成するための手段に属するもの		
区分	「〇〇なまち」	意見
生活環境	自然環境が崩れず土地利用されるまち	<input type="checkbox"/> 太陽光パネルばかりが増え、景観を悪くすることがないように土地利用がされるまち <input type="checkbox"/> 緑化が減っている。規制も必要
	地の利を活かせるまち	<input type="checkbox"/> ICがあり札幌圏への通勤に利便性があることをPRし、併せて空き家対策を講じれば人口増加に寄与するのではないか
	移住したいまちNO.1	<input type="checkbox"/> 安平町への移住者はいるが、まちとの繋がり方がわからない方がいる <input type="checkbox"/> 田舎らしさ落ち着く町並みを大切にすること ⇒それが人柄や住環境に影響する
	通信に困らないまち	<input type="checkbox"/> ネット環境が未だ整備されていない地域もある(富岡地区)
商業	近くで買い物ができるまち	<input type="checkbox"/> 通勤してしまう。都市に近いから住まない。都市(千歳・苫小牧)と比べると利便性に欠ける <input type="checkbox"/> 将来的に車を手放したときに近場で買い物ができる環境の整備は必要
	買い物に困らないまち	<input type="checkbox"/> 地区の拠点商店がなくなっている <input type="checkbox"/> 地元で買い物しましょう。町民意識
	商店街の復活したまち	<input type="checkbox"/> 賑わいがある(賑やかだったころの)商店街になればという期待がある
公共交通	地域公共交通手段・町外移動の手段が充実しているまち	<input type="checkbox"/> 車を手放した高齢者が交通難民にならない工夫が必要
	車が無くても病院・買い物に簡単に行けるまち	
	マイカー不要のまち(地域内完結)	
	公共交通機関の充実したまち	<input type="checkbox"/> 交通網整備が必要(車が使えない人のため) <input type="checkbox"/> 交通網が今は課題 ⇒既に流出している <input type="checkbox"/> アクセスが便利で他で仕事ができる町内交通網の充実
雇用	多種・多様な働く場のあるまち	<input type="checkbox"/> 農業・産業のみではなく、IT関係の企業を集約できれば若い世代の取込みにも繋がる
	働く場所が多いまち	<input type="checkbox"/> 働く場所がないから人が増えない(雇用はあるがニーズとのミスマッチが生じている)
	若い世代が働ける所があるまち	
農業	第一次産業の作り手の暮らし方、仕事が見せられるまち	<input type="checkbox"/> 農家の知恵や技術は、まちの魅力・強みである。それを見ることができると感じられる環境があればよい。
	学校給食で地元食材100%のまち	<input type="checkbox"/> 現実的には給食の全てを地産で賄うことは難しいが、その割合を増やす努力、食育の観点から子どもに食と農業のつながりを実感させることはこの町では極めて重要。
地域コミュニティ	健康管理に安心できるまち	
	挨拶が出来るまち	<input type="checkbox"/> 子どもも大人も挨拶が良い。 <input type="checkbox"/> 安平町は住みやすい。

③目標を達成するための手段に属するもの

区分	「〇〇なまち」	意見
文化・スポーツ	SLを中心としたまち	<input type="checkbox"/> JRの活用。種類の違うSLを追加で配置してはどうか。(今後どのようにSLを中心とした将来的なストーリー展開をするかが重要という意見あり)
	スポーツ施設を活かした子育ての出来るまち	<input type="checkbox"/> 高齢者の交通弱者対策に加え、子どもの部活動などの交通対策も必要 <input type="checkbox"/> スポーツ施設はあるが、人口減少によりスポーツ少年団が活動できない <input type="checkbox"/> 少年団合併できない⇒移動手段がない
	ゴルフ好きが集まるまち	<input type="checkbox"/> 既に地域にあるものを活用していくべき <input type="checkbox"/> 町内にゴルフ場はたくさんあるものの、沖縄県のように子ども達の練習の場がないことや金銭面・指導面でのサポートがないことから、活かせる魅力である。
	スポーツが盛んなまち	
	文化やスポーツでNO.1になれるまち	<input type="checkbox"/> ゴルフ少年少女の育成⇒指導必要 <input type="checkbox"/> 追分高校にゴルフ部を！
	スポーツをやっている子どもの送迎があるまち	<input type="checkbox"/> 子ども達の育成のためにゴルフを無料にする。
部活動でオール安平になれるまち	<input type="checkbox"/> 競技人口の少ないスポーツ、ゴルフなど個人競技の施設環境も充実。これを活用し、競技者に金銭面・指導面で充実させるべき	
福祉介護	身近に医療機関のあるまち	<input type="checkbox"/> 安平町で最期を迎える（自己完結）できる <input type="checkbox"/> 老後も安心して楽しく暮らすための施設・環境の整備が必要 <input type="checkbox"/> 子ども親戚に迷惑をかけない終末＝自己完結
	自己完結できるまち	
観光	通過されずに立ち寄られるまち	<input type="checkbox"/> 鹿公園から安平山へ回遊できるルートがあると良い <input type="checkbox"/> イベントなどが開催された際、宿泊施設がないことから町への恩恵を感じないことから出されたもの
	宿泊施設がたくさんあるまち	
	競馬ファンが集まるまち	<input type="checkbox"/> まちの知名度が低い <input type="checkbox"/> 交流人口はあるが、通過地点として捉えられている。滞在できる目的を見出すことが必要である
	目的を持って来訪できるまち	
	宿泊できる施設があるまち	
旅人がくるまち	<input type="checkbox"/> 交通が便利で素通りするのではないかと <input type="checkbox"/> 若者がSNSビジネスで町を豊かにする	
行政運営	ふるさと納税がたくさんあるまち	
	持続的行政運営ができるまち	<input type="checkbox"/> 借金がないまち ⇒安心できるまちづくりが出来ない ⇒無駄な事業（箱物）はいらない ⇒新しいものを作る必要性はない
その他	墓守りが続くまち	
	海外の人が訪れるまち、住んでもらえるまち	<input type="checkbox"/> 町内企業においても、海外からの労働者が数多くおり、そのような海外の方の受入体制が必要
	食と観光と福祉の充実したまち	<input type="checkbox"/> 食料品等の店が少ない <input type="checkbox"/> 食・エネルギーの地産地消

第2次安平町総合計画に向けたワークショップ「町民まちづくり会議」メンバー ※敬称略

①住民生活WG			②インフラWG		
環境、衛生、循環型社会形成、交通安全、防災、通信			道路整備、住宅・宅地、道路、河川、公園		
町民	追分地区町内会連合会	竹内 亨	町民	自治会町内会関係	土田 耕啓
	安平地区連合自治会	佐々木 弘		自治会町内会関係	須貝 政敏
	100人フォーラム参加者	箱崎 英輔		建設業関係	阿部 一二
	新規移住関係	田中 喜郎		地域活性化団体	園部 敏行
	行政委員	野村 治男		子ども会関係	松隈 雅樹
	未来創生委員	田中 廣		保護者関係	岡崎 友和
行政	住民生活課		行政	建設課	
	総務課			水道課	
				施設課	

③経済産業WG			④健康福祉WG		
農業全般、商工、工業、企業、観光、雇用等			福祉、保健、医療、保健、介護、公共交通等		
町民	商工業関係	福田 順一	町民	行政委員	畠山 美恵子
	農業関係	伊藤 雄太		行政委員	湯野 功
	農業関係	山田 晋也		福祉関係	村上 典隆
	観光関係	柿澤 博		福祉関係	有木 和則
	地域おこし関係	山田 由美子		福祉関係	高橋 光暢
	未来創生委員	山崎 努		未来創生委員	佐々木 信子
行政	まち推進課		行政	健康福祉課	
	農林課			教育委員会	
	農業委員会事務局			企画財政課	

⑤子育て・教育WG			⑥行政運営WG		
子育て支援、学校教育、社会教育、文化、スポーツ等			参画、協働、情報共有、地域間交流、行革、財政等		
町民	子育て施設関係	井内 聖	町民	行政委員	金川 優美子
	子育て施設関係	山城 義真		行政委員	水野 佐
	PTA関係	西島 ゆみ子		行政委員	佐々木 孝仁
	PTA関係	城畑 真理子		行政委員	富永 肇
	スポーツ少年団関係	若松 由紀子		100人フォーラム参加者	小笠原 愛子
	未来創生委員	福田 紳太郎		未来創生委員	山口 徳幸
行政	教育委員会		行政	企画財政課	
	健康福祉課			税務課、会計課	
				総務課、議会事務局	